

Ⅱ 学習指導・進路指導の現状と意識

第3章 学習指導

- 第1節 ティームティーチングなどの実施
- 第2節 心がけている授業時間の使い方・進め方
- 第3節 心がけている授業方法
- 第4節 心がけている授業内容
- 第5節 宿題
- 第6節 家庭学習指導
- 第7節 定期試験
- 第8節 通信簿

第4章 新学習指導要領への不安と対応

- 第1節 新学習指導要領への研究の進行状況
- 第2節 新学習指導要領の全面実施への不安（校長）
- 第3節 新学習指導要領の全面実施への不安（教員）
- 第4節 学習内容の増加への対応

第5章 進路指導

進路指導

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

資料編

第3章

学習指導

第1節 ティームティーチングなどの実施

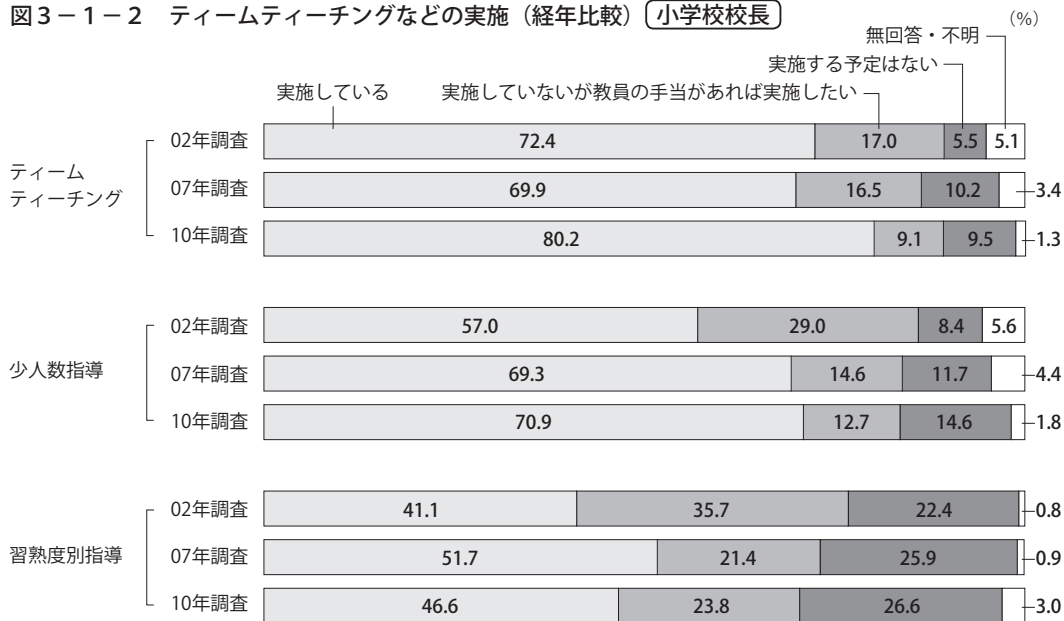
小・中学校とも、07年調査に比べて、チームティーチングの実施率は増加し、習熟度別指導の実施率は減少している。また、10年調査の結果を市町村の財政力別にみると、小学校のチームティーチングと少人数指導の実施率は、どの学級規模においても、財政力が「低」の市町村ほど実施率が低い。小学校の教科担任制の実施率は徐々に増加している。

図3-1-1 低学年以外での40人未満の学級編制の実施（10年調査） **小学校校長**



注) サンプル数は560人。

図3-1-2 ティームティーチングなどの実施（経年比較） **小学校校長**



注) サンプル数は、02年調査642人、07年調査528人、10年調査560人。

小学校で、低学年以外での40人未満の学級編制を実施している学校は34.6%である（「あてはまる」の%、図3-1-1）。学校は、これらに加え、チームティーチングや少人数指導などの指導方法を実施することにより、児童に対応した学習指導を実践している。

10年調査でこれらを「実施している」比率をみると（図3-1-2）、チームティーチングが8割、少人数指導が約7割、習熟度別指導が約4割5分である。また、実施率の変化をみると、チームティーチングは、07年調査に比べて10.3ポイント増加しているのに対し、習熟

表3-1-1 ティームティーチングなどの実施（学級規模別／10年調査） **小学校校長**

(%)

	1学級あたりの児童数		
	少ない 〔19人未満〕 (189)	中くらい 〔19人以上27人未満〕 (180)	多い 〔27人以上〕 (191)
ティームティーチング	63.5	86.1	91.1
少人数指導	35.4	83.3	94.2
習熟度別指導	15.3	58.9	66.0

注1) 「実施している」の%。

注2) 1学級あたりの児童数は、校長と教員の回答から特定した各学校の「児童数」と「学級数」より算出したもの（「児童数」÷「学級数」）。学年・学級により、児童数は異なると思われるが、その平均を表している。少ない・中くらい・多いは、サンプル数に偏りがなく3つに区分したものの。

注3) ()内はサンプル数。

表3-1-2 ティームティーチングなどの実施（学級規模別・市町村の財政力別／10年調査） **小学校校長**

(%)

		1学級あたりの児童数			合計 (220) (237)
		少ない 〔19人未満〕 (40) (134)	中くらい 〔19人以上27人未満〕 (81) (68)	多い 〔27人以上〕 (99) (35)	
ティームティーチング	財政力高	72.5	85.2	92.9	86.4
	財政力低	62.7	83.8	85.7	72.2
少人数指導	財政力高	40.0	88.9	93.9	82.3
	財政力低	35.1	77.9	91.4	55.7
習熟度別指導	財政力高	12.5	60.5	62.6	52.7
	財政力低	16.4	55.9	74.3	36.3

注1) 「実施している」の%。

注2) 1学級あたりの児童数の区分は、表3-1-1参照。

注3) 市町村の財政力の高・低は、回答者が回答した都道府県・市区町村名により財政力指数を特定し、サンプル数に偏りがなく2つに区分したものの。「高」は財政力指数0.65以上、「低」は0.65未満（「統計でみる市区町村のすがた2010」の財政力データを使用）。特別区（東京23区）および政令指定都市は、財政力指数の算出方法や法制上の差異から市町村データと比較することが困難なため、分析から除外している。

注4) ()内はサンプル数、上段：財政力高/下段：財政力低。

度別指導は5.1ポイント減少している。

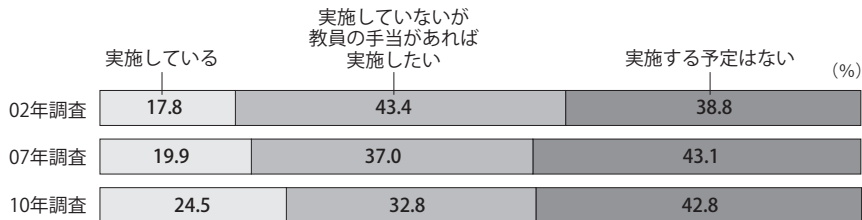
表3-1-1は、これらの実施率を学級規模別に示したものである。これをみると、学級規模が大きいほどこれらの実施率は高く、ティームティーチングおよび少人数指導は、1学級あたりの児童数が「中くらい」の学校では8割以上、「多い」学校では9割以上で実施されている。また、ティームティーチングは児童数が「少ない」学校でも6割以上で実施されており、特別支援教育などにも対応したものである。

さらに、表3-1-2は、それぞれの実施率を、市町村の財政力別に示したものである。こ

れをみると、ティームティーチングと少人数指導の実施率は、どの学級規模においても、財政力が「低」の市町村ほど実施率が低い傾向にある。実施には、都道府県の影響も大きいと思われるが、市町村の財政力も影響していると考えられる。一方、習熟度別指導は、財政力が「低」の市町村でも実施率が高い場合があり、市町村の財政力の影響は小さいと考えられる。ただし、図3-1-2をみると、10年調査の「実施していないが教員の手当があれば実施したい」の比率は、それぞれ1割弱～2割強であり、これらの取り組みに対しては、さらなる手当が必要とされているといえよう。

II 学習指導・進路指導の現状と意識

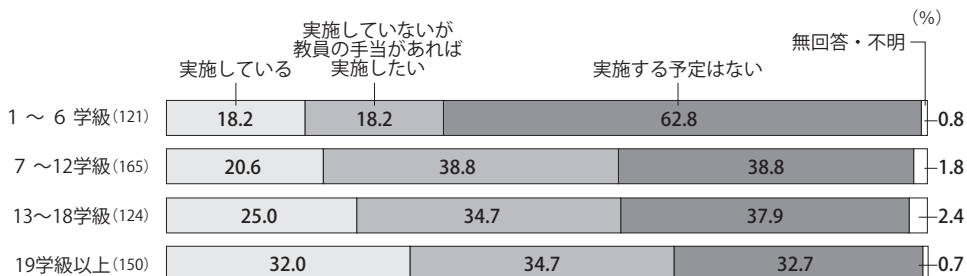
図3-1-3 国語、社会、算数、理科における教科担任制の実施（経年比較） 小学校校長



注1) 調査により無回答・不明の比率が異なるため、無回答・不明を除いて算出している。

注2) サンプル数は、02年調査580人、07年調査492人、10年調査552人。

図3-1-4 国語、社会、算数、理科における教科担任制の実施（学校規模別／10年調査） 小学校校長



注1) 「学級数」は、校長と教員の回答から特定したものの。

注2) () 内はサンプル数。

次に、国語、社会、算数、理科における教科担任制の実施についてみてみよう（図3-1-3）。「実施している」の比率は徐々に増加しており、10年調査では4校に1校が実施している（24.5%）。また、図3-1-4をみると、学校規模の大きい学校ほど実施率が高く、19学級以上の学校では3割を超えている。また、「実施していないが教員の手当があれば実施したい」の比率は、学校規模が「7～12学級」「13～18学級」「19学級以上」の学校で3割を超えている。

次に、中学校についてみてみよう。

中学校で、40人未満の学級編制を実施している学校は57.4%であり、小学校より比率が高い（「あてはまる」の%、図3-1-5）。

チームティーチングなどを「実施している」

の比率をみると（図3-1-6）、10年調査では、チームティーチングが8割強、少人数指導が7割5分、習熟度別指導が3割5分である。実施率の変化は、小学校と同様の傾向であり、07年調査に比べて、チームティーチングは5.8ポイント増加し、習熟度別指導は14.0ポイント減少している。

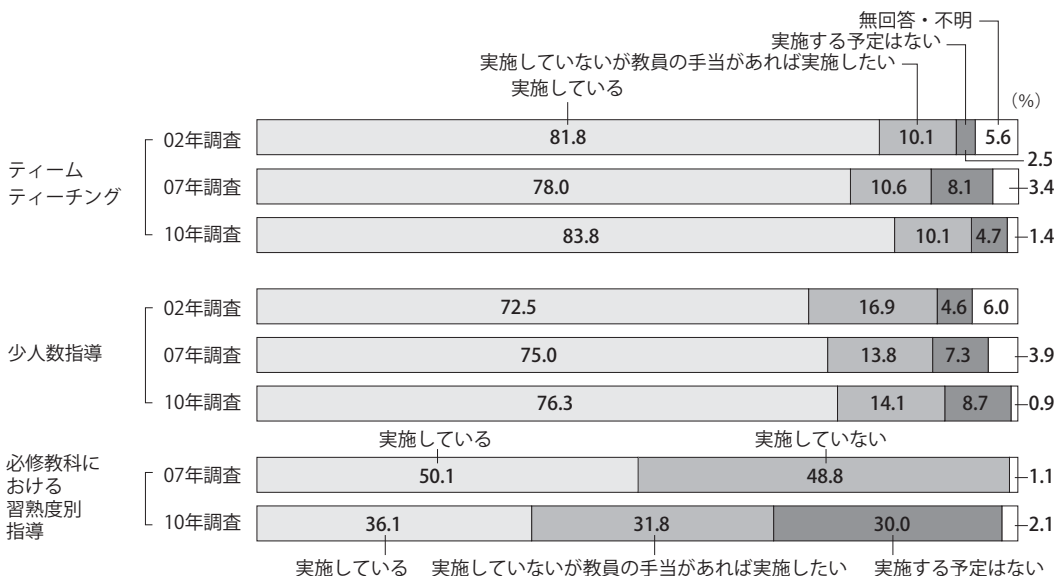
また、小学校と同様に、これらの実施率は、学級規模の大きい学校ほど高い傾向にある。ただし、中学校は学級規模のばらつきが小さいためか、1学級あたりの生徒数が「少ない」学校でも、チームティーチングは8割弱、少人数指導は6割強で実施されている（表3-1-3）。

図3-1-5 40人未満の学級編制の実施（10年調査） **中学校校長**



注) サンプル数は573人。

図3-1-6 ティームティーチングなどの実施（経年比較） **中学校校長**



注1) 「必修教科における習熟度別指導」の07年調査の「実施している」の数値は、学年別・教科別にたずねた質問のいずれかで「実施している」と回答した校長の比率、「実施していない」は、いずれにも「実施していない」と回答した校長の比率。02年調査は、質問のしかたが異なるため、分析から除いている。

注2) サンプル数は、02年調査603人、07年調査559人、10年調査573人。

表3-1-3 ティームティーチングなどの実施（学級規模別／10年調査） **中学校校長**

	1学級あたりの生徒数		
	少ない [26人未満] (185)	中くらい [26人以上31人未満] (193)	多い [31人以上] (190)
チームティーチング	77.8	88.6	84.7
少人数指導	61.6	80.3	85.8
必修教科における習熟度別指導	28.6	40.9	38.4

注1) 「実施している」の%。

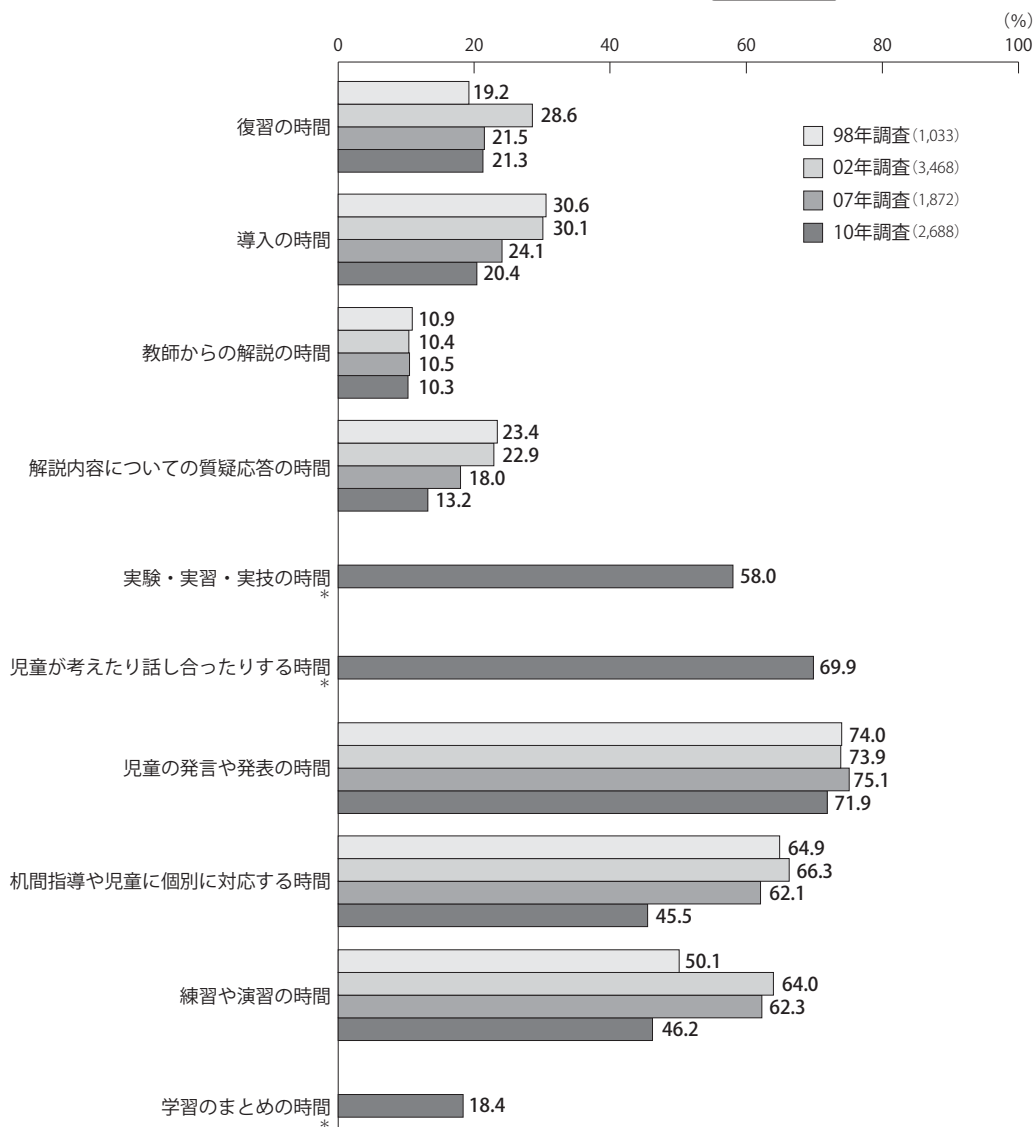
注2) 1学級あたりの生徒数は、校長と教員の回答から特定した各学校の「生徒数」と「学級数」より算出したもの（「生徒数」÷「学級数」）。学年・学級により、生徒数は異なると思われるが、その平均を表している。少ない・中くらい・多いは、それをサンプル数に偏りがないうよう3つに区分したものを。

注3) ()内はサンプル数。

第2節 心がけている授業時間の使い方・進め方

小・中学校の教員とも「児童・生徒の発言や発表の時間」と回答した教員がもっとも多い傾向は変わらない。一方、07年調査から「机間指導や児童・生徒に個別に対応する時間」「練習や演習の時間」と回答した教員は減少している。教員が児童や生徒と向き合う時間を確保することが以前より難しくなっているのかもしれない。また学力別に授業時間の使い方や進め方をみたと、学力層によって時間の使い方や進め方に違いがみられた。教員は目の前の児童や生徒に合わせて授業時間の使い方や進め方を工夫しているようである。

図3-2-1 心がけている授業時間の使い方・進め方（経年比較） **小学校教員**



注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) *は、10年調査より新たに追加した項目。

注3) ()内はサンプル数。

教科の授業を進める際の時間の使い方や進め方に関する回答(図3-2-1)をみたところ、「児童の発言や発表の時間」が71.9%ともっとも高く、その傾向は98年調査から変わらない。次いで回答の比率が高かったのは、10年調査から新たに追加した「児童が考えたり話し合ったりする時間」で69.9%、「実験・実習・実技の時間」が58.0%と高くなっている。一方、回答の比率が低かった項目は「教師からの解説の時間」や「解説内容についての質疑応答の時間」で、それぞれ10%程度にとどまっている。また回答の傾向を経年でみたところ、07年調査から10年調査にかけて「机間指導や児童に個別に対応する時間」や「練習や演習の時間」で、約16ポイント減少している。

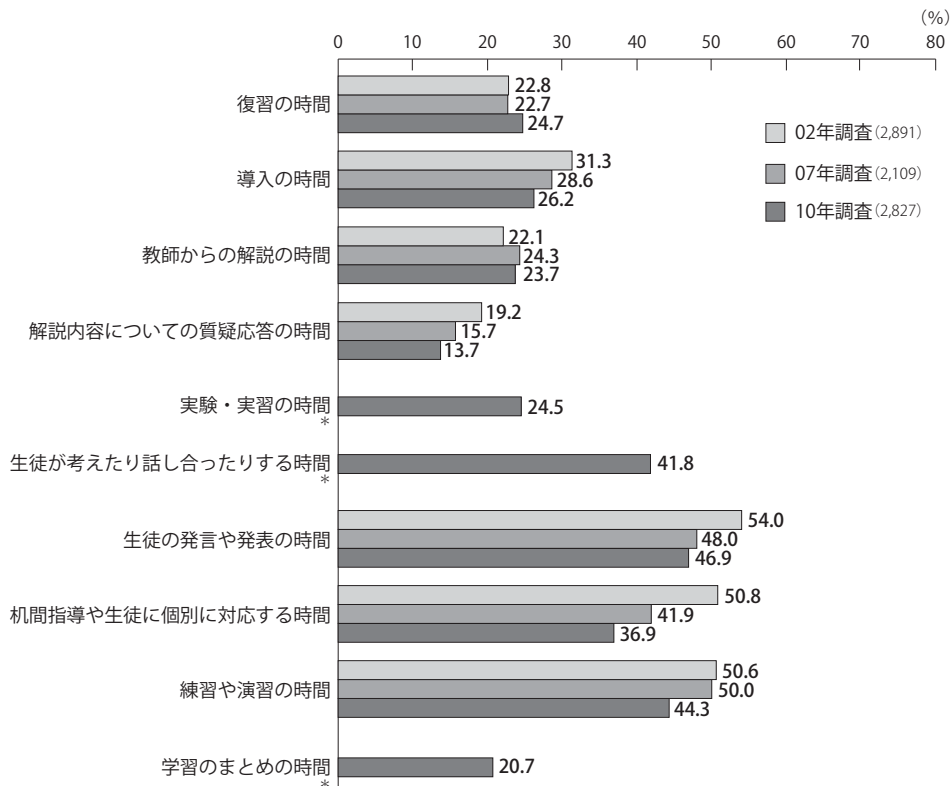
以上の結果から、これまでと変わらず、多くの小学校教員が、授業における児童の発言や発表の時間を大切にしたい授業時間の使い方・進め方を心がけている一方で、机間指導や児童に個

別に対応する時間を心がけている教員は減少していることがわかる。

こうした変化の背景としては、まず2011年度4月より全面実施される新学習指導要領への移行の影響が考えられる。指導する学習内容が増加したことにより、授業時間中に机間指導や児童に個別に対応する時間を心がける余裕がなくなっているのかもしれない。あるいは、授業時間の使い方・進め方として、子ども同士の学び合いの時間をより心がける教員が増加したことで、相対的に「机間指導や個別に対応する時間」や「練習や演習の時間」を心がける教員が減少したのかもしれない。また、10年調査より新たに追加した項目「実験・実習・実技の時間」「児童が考えたり話し合ったりする時間」が、他の項目のポイント減少に影響を与えている可能性がある。少なくともこれらの点に留意しながら、数値を解釈していく必要があるだろう。

Ⅱ 学習指導・進路指導の現状と意識

図3-2-2 心がけている授業時間の使い方・進め方（経年比較） **中学校教員**



注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

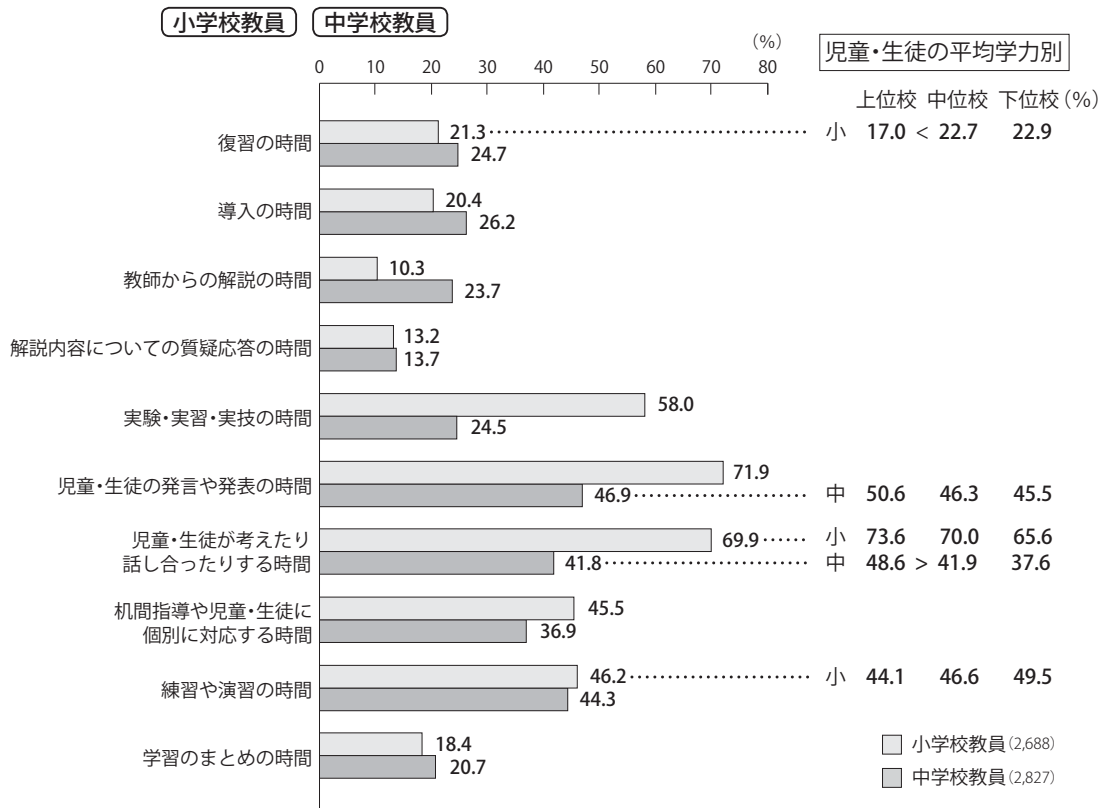
注2) *印は、10年調査より新たに追加した項目。

注3) () 内はサンプル数。

次いで、中学校教員の授業時間の使い方・進め方の回答を示したものが図3-2-2である。全項目の中で「生徒の発言や発表の時間」がもっとも高く、46.9%の教員が回答しており、07年調査の「練習や演習の時間」を抜いてもっとも高くなっている。次いで2番目に高かった回答が「練習や演習の時間」で44.3%、さらに「生徒が考えたり話し合ったりする時間」が41.8%と続いている。また経年で教員の回答を比較したところ、07年調査で41.9%であった「机間指導や生徒に個別に対応する時間」が、10年調

査では36.9%に減少している。また「練習や演習の時間」も07年調査では教員の回答比率が50.0%だったのに対し、10年調査では44.3%に減少している。以上の結果をふまえると、中学校教員も、小学校教員と同様、生徒に個別に対応する時間や、生徒が練習や演習に取り組む時間を心がけることが難しくなっている様子がかがえる。ただし、今回の調査では、新規項目を追加しており、それらが既存項目のポイントに影響を与えている可能性がある。

図3-2-3 心がけている授業時間の使い方・進め方(学校段階別、児童・生徒の平均学力別/10年調査)



注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) 「実験・実習・実技の時間」は、中学校では「実験・実習の時間」とたずねている。

注3) 「児童・生徒の平均学力別」は、小・中学校の校長に「貴校の平均的な児童・生徒の学力は、全国の公立小・中学校の中でだいたいどれくらいですか」とたずねた質問に対して、「上のほう」「やや上のほう」と回答した場合を「上位校」、「真ん中くらい」を「中位校」、「やや下のほう」「下のほう」を「下位校」としている。

注4) < > は5ポイント以上差があるもの。

注5) () 内はサンプル数。

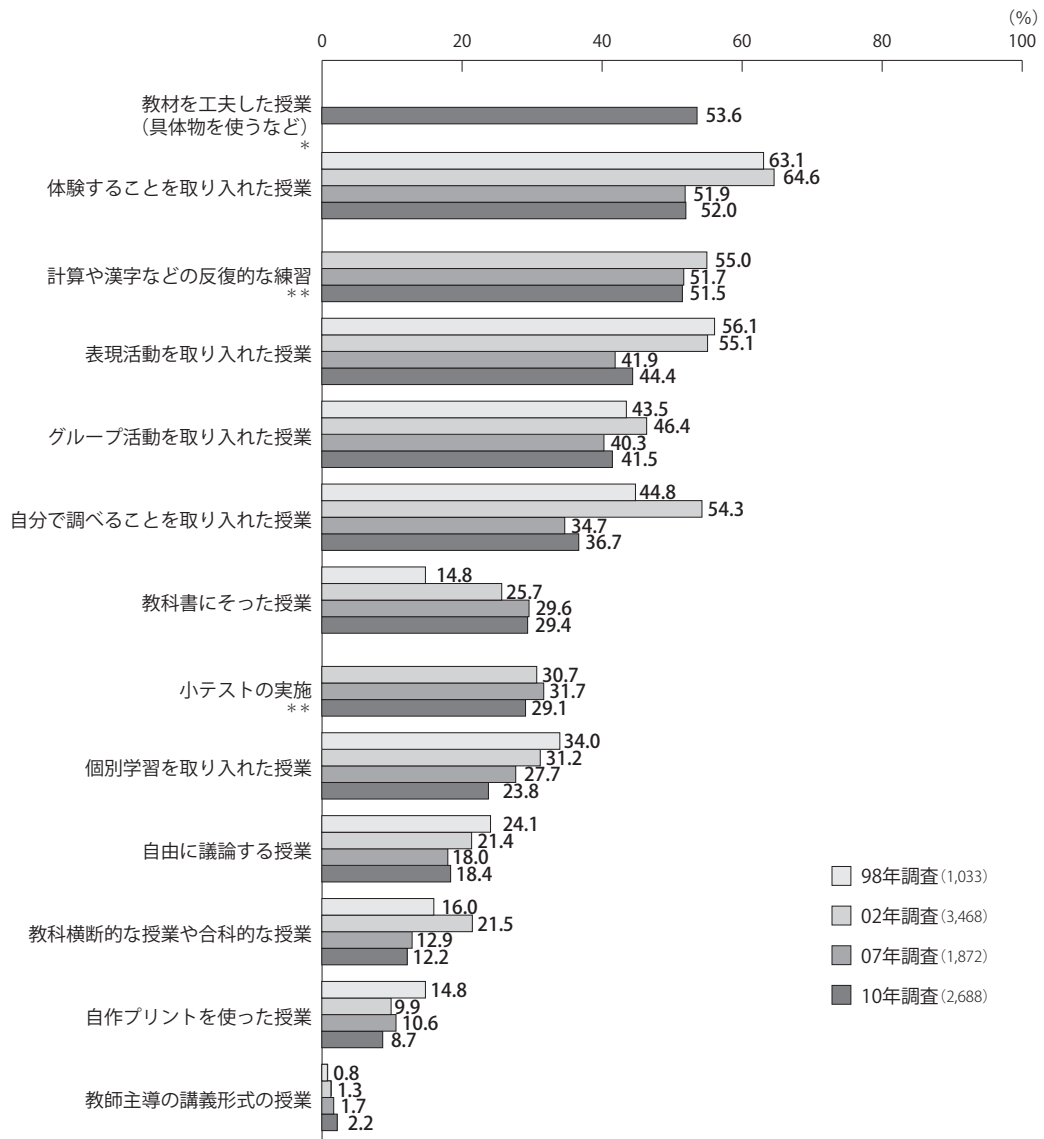
最後に小・中学校教員の回答を比較してみよう(図3-2-3)。小学校は中学校に比べ、「児童・生徒の発言や発表の時間」(小71.9% > 中46.9%)や「児童・生徒が考えたり話し合ったりする時間」(小69.9% > 中41.8%)を心がけると回答した教員の比率が突出して高い。同項目は、中学校の全回答の中では高い比率を示しているが、その比率は40%台にとどまっている。一方、「導入の時間」(小20.4% < 中26.2%)や「教師からの解説の時間」(小10.3% < 中23.7%)は、小学校よりも中学校で、教員の回答比率が高くなっている。以上の結果から、児童の発言を中心とした小学校の授業と、教師からの解説の時間や生徒個人が課題に取り組む時間がより盛り

込まれた中学校の授業との違いが明らかになり、小学校から中学校にかけて授業時間の使い方・進め方が変化する様子がみて取れる。また児童・生徒の平均学力別に回答をみたところ、学力下位層の多い学校では、「復習の時間」や「練習や演習の時間」を心がけていると回答した教員が多く、一方、学力上位層の多い学校では、「児童・生徒の発言や発表の時間」「児童・生徒が考えたり話し合ったりする時間」を心がけていると回答した教員が多くなっていることから、教員は自分自身が担当している、目の前の児童や生徒の学力に合わせて、授業時間の使い方や進め方を工夫していることが推測される。

第3節 心がけている授業方法

小・中学校教員とも心がけている授業方法のトップは、「教材を工夫した授業（具体物を使うなど）」で4～5割の教員が「多くするように特に心がけている」と回答している。また、学校段階別にみると、小学校では「体験することを取り入れた授業」や「計算や漢字などの反復的な練習」が、中学校では「グループ活動を取り入れた授業」「表現活動を取り入れた授業」が上位にあがっている。

図3-3-1 心がけている授業方法（経年比較） **小学校教員**

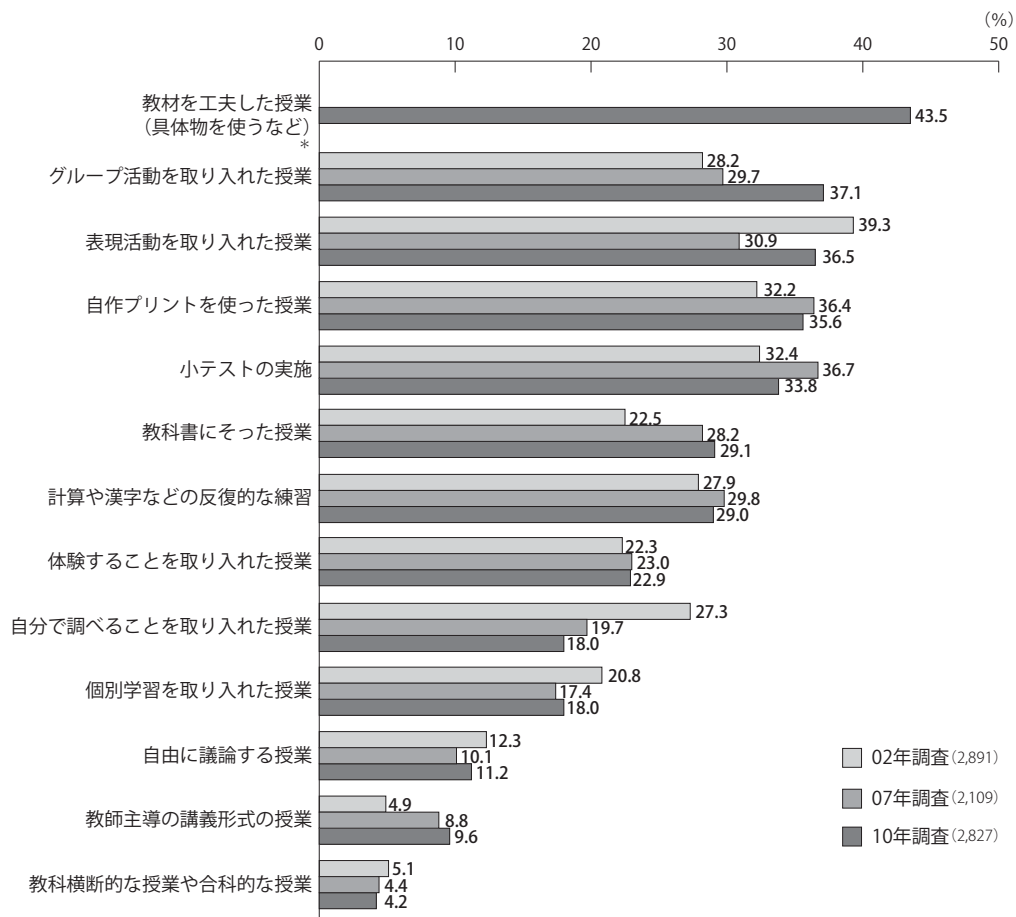


注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) *印は、10年調査より新たに追加した項目。**印は、98年調査ではたずねていない。

注3) () 内はサンプル数。

図3-3-2 心がけている授業方法（経年比較） **中学校教員**



注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) *印は、10年調査より新たに追加した項目。

注3) () 内はサンプル数。

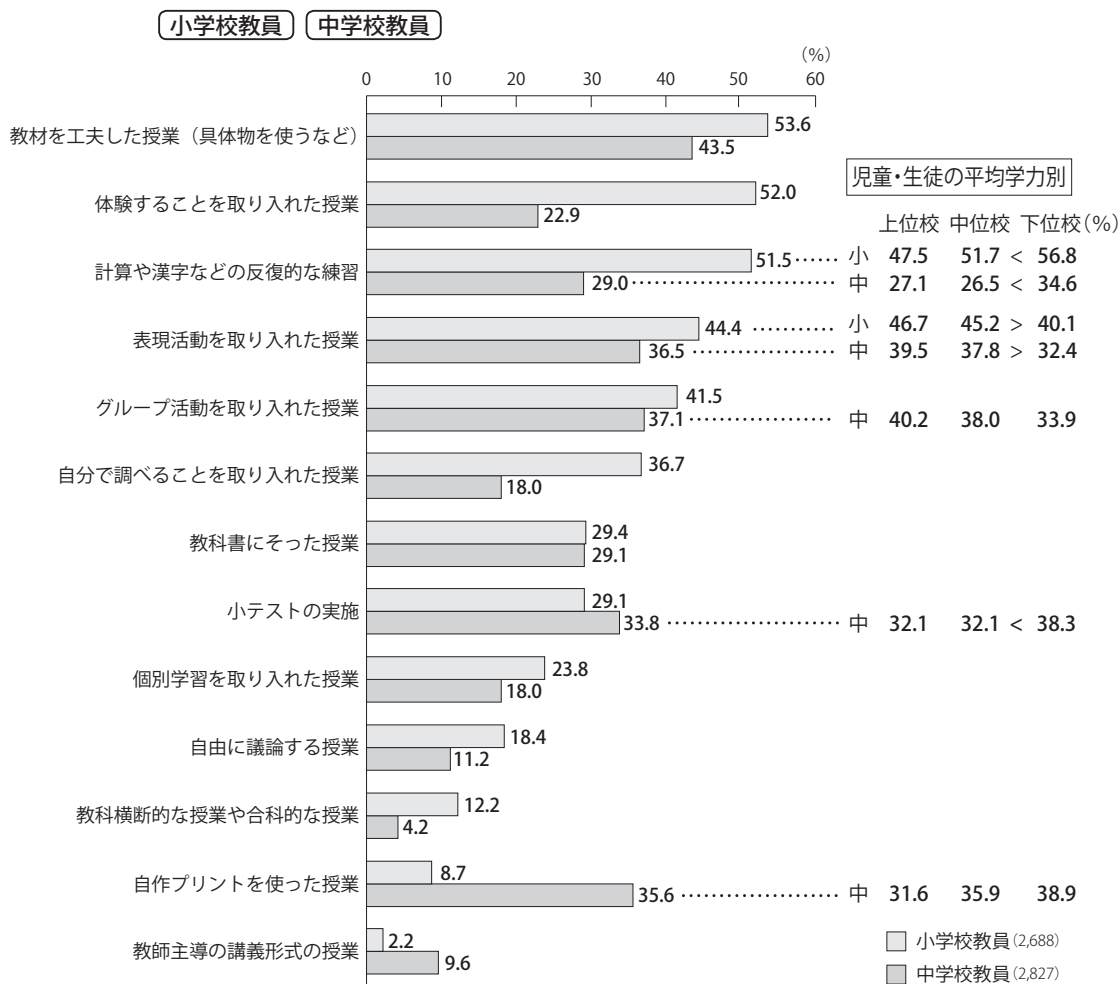
図3-3-1は、小学校教員が心がけている授業方法の回答をみたものである。全体の傾向をみたところ、「教材を工夫した授業（具体物を使うなど）」「体験することを取り入れた授業」「計算や漢字などの反復的な練習」と回答した教員が5割、「表現活動を取り入れた授業」「グループ活動を取り入れた授業」が4割となっている。また経年で回答の傾向をみると、「個別学習を取り入れた授業」が年々減少しているほか、02年調査から07年調査において大きくポイントを下げた「表現活動を取り入れた授業」「グループ活動を取り入れた授業」「自分で調べることを取り入れた授業」において、わずかではあるが、ポイントが増加している。また98年調査以降、年々増加していた「教科書にそった授業」は10年調査では横ばいである。

次に、中学校教員が心がけている授業方法を

みてみよう（図3-3-2）。もっとも回答の比率が高かったのは「教材を工夫した授業（具体物を使うなど）」で43.5%の教員が「多くするように特に心がけている」と回答している。2番目に回答した教員が多かった項目は「グループ活動を取り入れた授業」で37.1%、さらに「表現活動を取り入れた授業」が36.5%と続いている。前回調査から変化が大きかった項目は「グループ活動を取り入れた授業」で7.4ポイントの増加となっている。また02年調査から07年調査で大きくポイントを下げた「表現活動を取り入れた授業」も、今回の調査では5.6ポイントの増加となっている。2012年度の新学習指導要領の全面実施に向けて、活用を意識した取り組みが、授業の中で再び重視されるようになってきているのかもしれない。

II 学習指導・進路指導の現状と意識

図3-3-3 心がけている授業方法（学校段階別、児童・生徒の平均学力別／10年調査）



注1) 多くするように特に心がけている」の%。

注2) 「児童・生徒の平均学力別」は、小・中学校の校長に「貴校の平均的な児童・生徒の学力は、全国の公立小・中学校の中でだいたいどれくらいですか」とたずねた質問に対して、「上のほう」「やや上のほう」と回答した場合を「上位校」、「真ん中くらい」を「中位校」、「やや下のほう」「下のほう」を「下位校」としている。

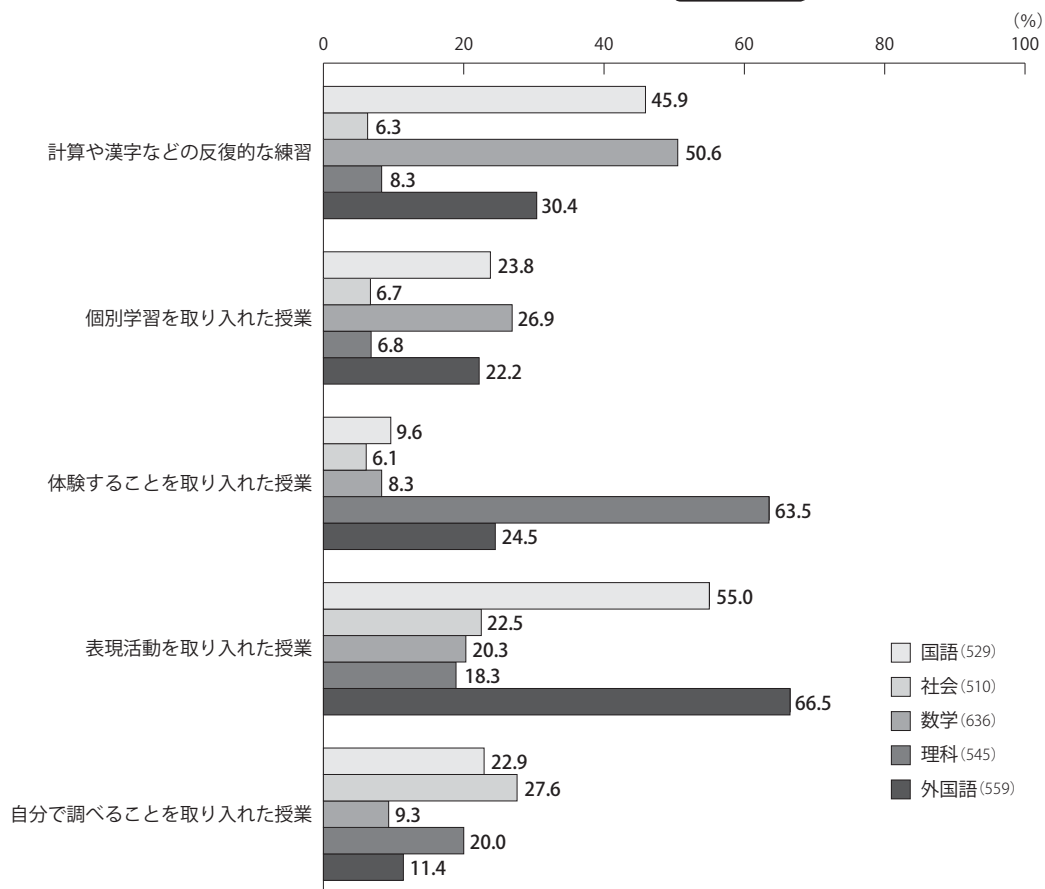
注3) < > は5ポイント以上差があるもの。

注4) () 内はサンプル数。

図3-3-3は、小・中学校教員の心がけている授業方法を比較したものである。全体的に中学校教員に比べ、小学校教員で「多くするように特に心がけている」の比率が高い。「体験することを取り入れた授業」（小52.0% > 中22.9%）、「計算や漢字などの反復的な練習」（小51.5% > 中29.0%）、「自分で調べることを取り入れた授業」（小36.7% > 中18.0%）、「教材を工夫した授業」（小53.6% > 中43.5%）といった項目では、小・中学校教員の回答比率に10ポイント以上の差がみられる。一方、小学校教員より中学校教員の回答比率が10ポイント以上高

いのは、「自作プリントを使った授業」（小8.7% < 中35.6%）のみである。また、5ポイント以上の差ではあるが、「教師主導の講義形式の授業」（小2.2% < 中9.6%）でも、中学校教員の比率が小学校教員の比率を上回っている。「グループ活動を取り入れた授業」「教科書にそった授業」「小テストの実施」については、回答比率に大きな差はみられない。以上の結果をまとめると、小学校では、児童の発言・体験を中心とした授業や計算や漢字などの反復的な練習を、中学校では、小テストや自作プリントを使った授業や表現活動やグループ活動を取り入れた授

図3-3-4 心がけている授業方法（担当教科別／10年調査）中学校教員



注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) ()内はサンプル数。

業を、心がけている教員が多いことがわかる。

つづいて、児童・生徒の平均学力別に心がけている授業方法をみてみよう。「計算や漢字などの反復的な練習」をみると、小・中学校ともに児童・生徒の平均学力が下位の学校においてポイントが高くなっている。一方、「表現活動を取り入れた授業」は、児童・生徒の平均学力が上位の学校においてポイントが高くなっている。前節の授業時間の使い方・進め方だけでなく、授業方法についても、小・中学校教員が、目の前の児童や生徒に合わせて、取り入れる授業方法を工夫している様子うかがえる。

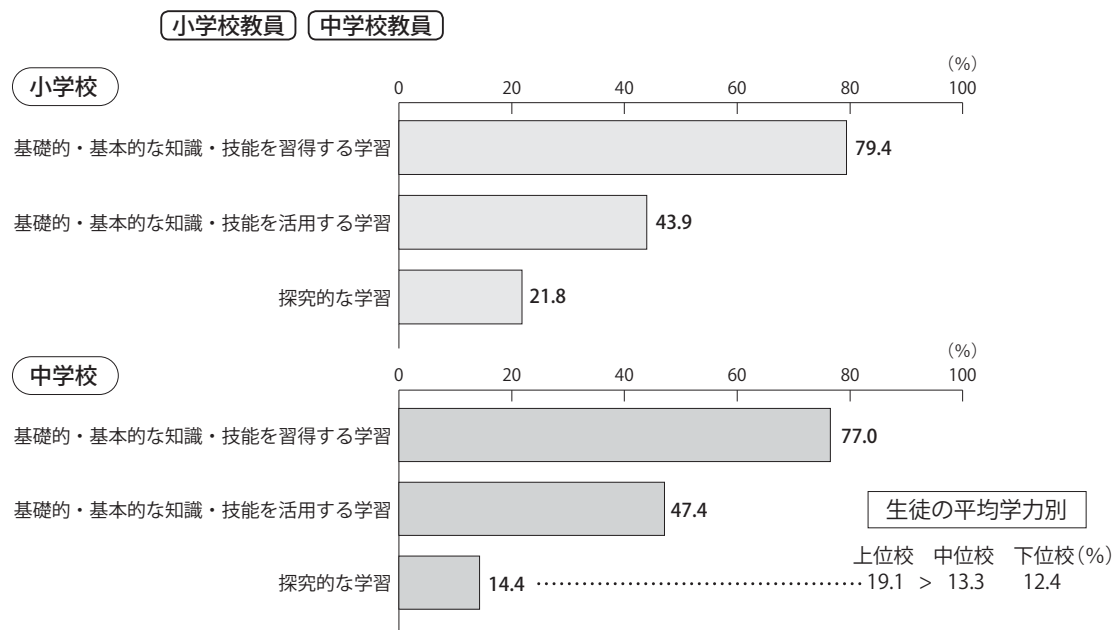
また、図3-3-4は、心がけている授業方法について担当教科別に回答をみている。「計算や漢字などの反復的な練習」が高かったのは、国語や数学で4～5割、外国語で3割。漢字や英単語、計算力といった、繰り返し学習するこ

とにより身につける力がより求められる教科において、比率が高くなっている。また「体験することを取り入れた授業」では、理科の教員の回答が突出して高い。理科の教員にとっては、実験などを通して生徒にどのような体験をさせるかが、授業においてもっとも心がける点になっているようである。次いで「表現活動を取り入れた授業」であるが、国語や外国語の教員において5～6割と回答の比率が高くなっている。言語を学ぶ教科だけに、生徒が学んだものを発信、表現する機会を授業の中で取り入れることを重視している様子うかがえる。最後に「自分で調べることを取り入れた授業」であるが、国語や社会、理科で2～3割の教員が心がけると回答している。このように教師は、各教科それぞれの特徴に合わせた授業方法を取り入れているようである。

第4節 心がけている授業内容

「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」と回答した教員は小・中学校ともに7～8割。次いで「基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習」と回答した教員は4～5割。「探究的な学習」と回答した教員は小学校で2割、中学校で1割。小・中学校の教員は、児童や生徒の学力にかかわらず、目の前の児童や生徒に合わせたかたちで基礎・基本の習得や活用、さらに探究的な学習を取り入れている。

図3-4-1 心がけている授業内容①（学校段階別・生徒の平均学力別／10年調査）



注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) 「児童・生徒の平均学力別」は、小・中学校の校長に「貴校の平均的な児童・生徒の学力は、全国の公立小・中学校の中でだいたいどれくらいですか」とたずねた質問に対して、「上のほう」「やや上のほう」と回答した場合は「上位校」、「真ん中くらい」を「中位校」、「やや下のほう」「下のほう」を「下位校」としている。

注3) <>は5ポイント以上差があるもの。

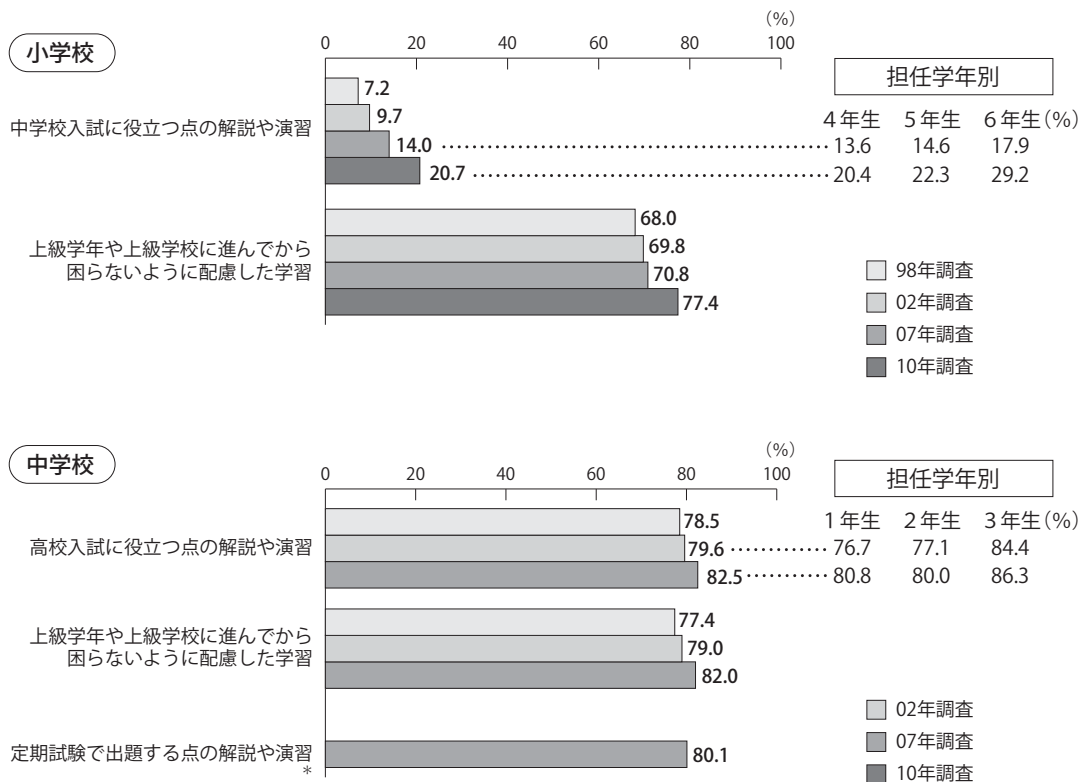
注4) サンプル数は、小学校教員2,688人、中学校教員2,827人。

小・中学校教員の心がけている授業内容を示したのが、図3-4-1である。まず小学校教員の回答をみると、「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」と回答した教員は79.4%、「基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習」は43.9%、「探究的な学習」は21.8%であった。一方、中学校教員の回答をみると、「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」と回答した教員は77.0%、「基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習」は47.4%、「探究的な学習」は14.4%であり、小・中学校教員ともに同様の回

答の傾向が確認された。

また児童・生徒の平均学力別に回答の傾向をみたところ、中学校教員の「探究的な学習」において生徒の平均学力が上位の学校と下位の学校で差が確認されたものの、それ以外の項目では、学力による授業内容の差は確認されなかった。これらの結果から、小・中学校の教員は、児童や生徒の学力にかかわらず、目の前の児童や生徒に合わせたかたちで基礎・基本の習得や活用、さらに探究的な学習を取り入れている様子が推察される。

図3-4-2 心がけている授業内容② (学校段階別/経年比較) **小学校教員** **中学校教員**



注1) 「多くするように特に心がけている」+「まあ心がけている」の%。
 注2) 10年調査では「中学校入試(高校入試)に役立つ点の解説や演習」とたずねているが、07年調査までは「将来、(国・私立中学校や)高校入試に役立ちそうな点の解説や演習」とたずねている。
 注3) *印は、10年調査より新たに追加した項目。
 注4) 小学校の担任学年別は、4~6年生のみ示している。
 注5) サンプル数は、小学校教員2,688人、中学校教員2,827人。

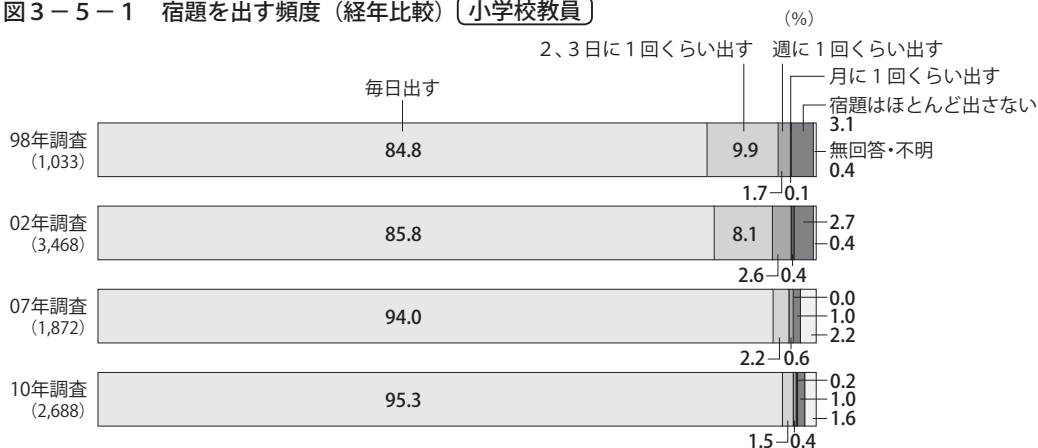
図3-4-2は、教員が回答した「心がけている授業内容」の受験や進学にかかわる項目を取りだし、経年で変化をみたものである。まず、小学校教員の回答をみると、「中学校入試に役立つ点の解説や演習」を「心がけている」「多くするように特に心がけている」+「まあ心がけている」、以下同)と回答した教員の比率は20.7%、「上級学年や上級学校に進んでから困らないように配慮した学習」は77.4%であった。一方、中学校教員の回答をみると、「高校入試に役立つ点の解説や演習」を「心がけている」と回答した教員は82.5%、「上級学年や上級学校に進んでから困らないように配慮した学習」は

82.0%、「定期試験で出題する点の解説や演習」(中学校のみ)は80.1%であった。上級学年や上級学校を見据えた指導という点では、小・中学校教員の心がけに大きな差は確認されなかったものの、入試に役立つ点の解説や演習という点では、小・中学校教員の心がけに大きな差がみられる(小20.7% < 中82.5%)。しかしここ数年の変化に着目すると、より入試に対する意識が高まっているのは小学校教員で、07年調査では1割台であった回答の比率が、10年調査では約2割に増加している。今後、小学校でも入試を意識した授業内容が増加していくかもしれない。

第5節 宿題

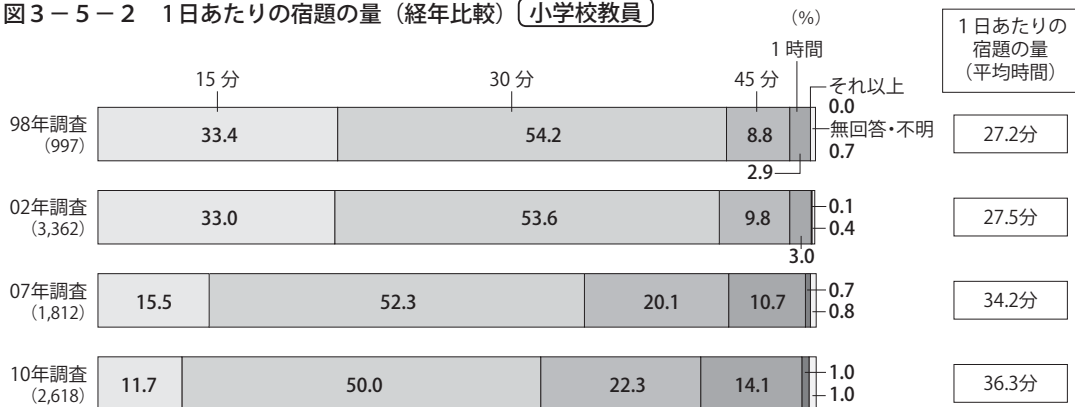
小・中学校教員ともに、宿題を出す頻度は07年調査から変化なし。また1日あたり（1回あたり）の宿題の量にもほとんど変化はみられない。宿題の内容は、小学校で「副教材、問題集」「自作プリント」が、中学校で「定期試験対策」や「入試対策」が増加傾向。

図3-5-1 宿題を出す頻度（経年比較）**小学校教員**



注) () 内はサンプル数。

図3-5-2 1日あたりの宿題の量（経年比較）**小学校教員**



注1) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

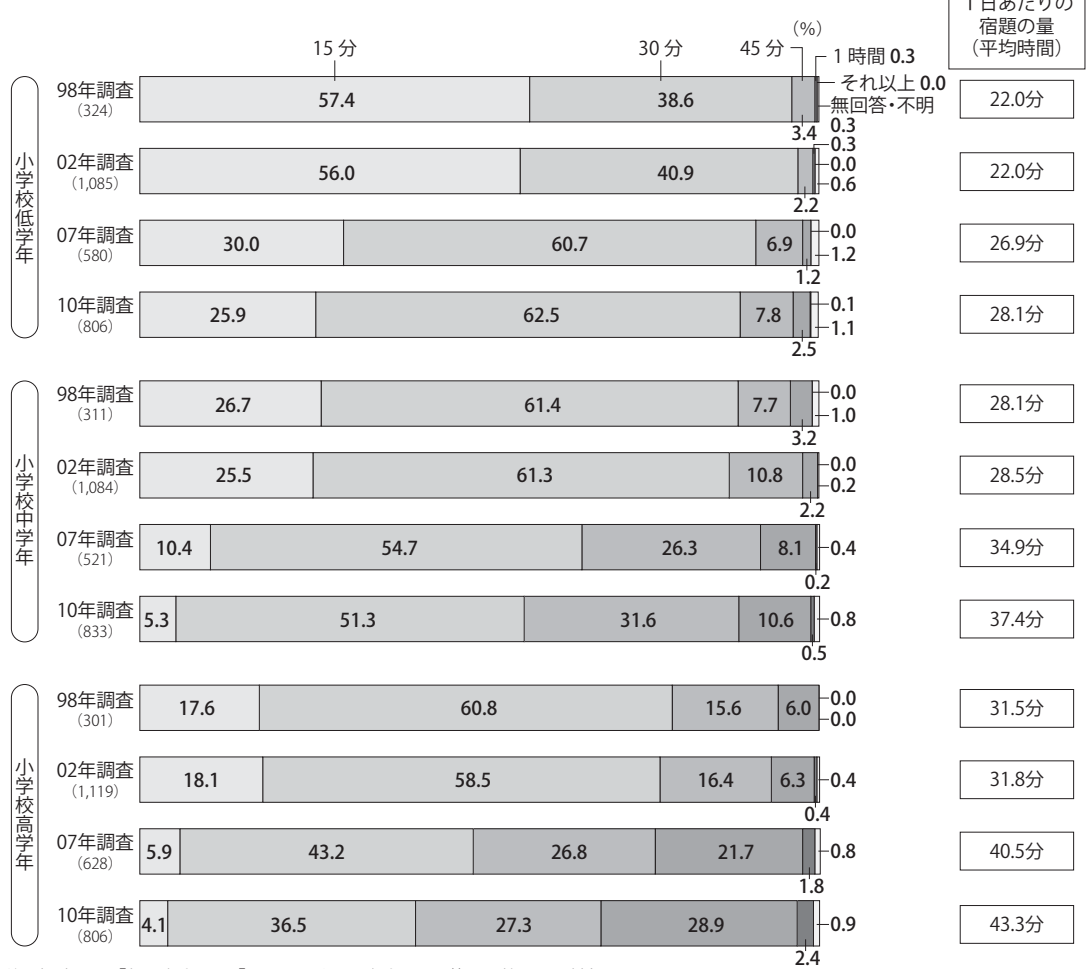
注2) 平均時間は、「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分に置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注3) () 内はサンプル数。

小学校教員がどれくらいの頻度で宿題を出しているのか、宿題の頻度をみたものが図3-5-1である。宿題を「毎日出す」と回答した教員は95.3%で、07年調査から変化はみられない。また「1日あたりの宿題の量」についてみたところ（図3-5-2）、こちらも07年調査から変化はみられない。ただし、98年調査からみる

と、ごく小さな変化ではあるが、「15分」「30分」と回答した教員の比率が年々減少し、その一方で「45分」「1時間」と回答した教員の比率が年々増加している。1日あたりの宿題の平均時間も、07年調査からはほとんど変化がみられないが、98年調査から比較すると、10分ほど増加している。

図3-5-3 1日あたりの宿題の量（担任学年段階別／経年比較） **小学校教員**



注1) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

注2) 平均時間は、「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分に置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注3) 小学校1・2年担任を「小学校低学年」、3・4年担任を「小学校中学年」、5・6年担任を「小学校高学年」としている。

注4) ()内はサンプル数。

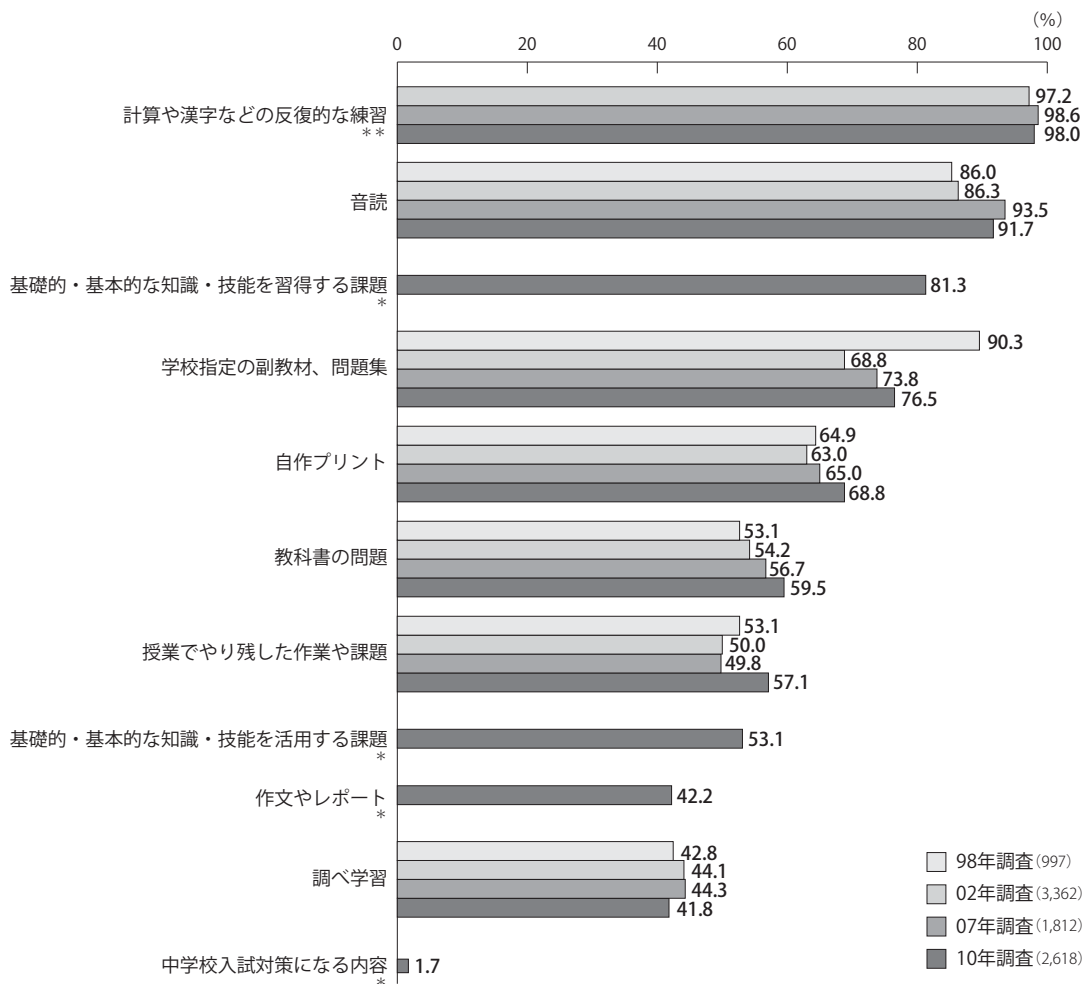
担任学年段階別に、1日あたりの宿題の量を経年でみたものが図3-5-3である。10年調査の回答をみたところ、低学年では「30分」と回答した教員が6割と最も多く、宿題の平均時間は28.1分となっている。宿題の量は学年段階があがるにつれて増加していき、中学年では「30分」「45分」と回答した教員が8割で平均時間が37.4分、高学年では「45分」「1時間」「それ以上」と回答した教員が6割で平均時間は43.3分である。

さらに宿題量の変化を経年でみると、低学年においては07年調査からそれほど変化がみられないものの、中学年（07年調査34.9分<10年調査37.4分）や高学年（07年調査40.5分<10年調査43.3分）では、依然、微増傾向がみ

られる。またもう少し長い期間（98年調査と10年調査）で比較すると、10年調査の小学校低学年の宿題量は、98年調査の小学校中学年と同じ量であることがわかる。また10年調査の中学年に至っては、98年調査の高学年の宿題量よりも平均時間で5分以上多い宿題が出されている。2011年度から小学校で、2012年度から中学校で新学習指導要領が全面実施され、学習内容が増加することを考慮すると、教員には、今以上に授業時間だけでなく、宿題の時間も活用しながら（どのような内容を、どれだけ宿題として出すか）、全体として学習指導をどのように構成していくのか、そのマネジメント力が求められるかもしれない。

Ⅱ 学習指導・進路指導の現状と意識

図3-5-4 宿題の内容（経年比較） **小学校教員**



注1) 「よく出す」+「たまに出す」の%。

注2) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

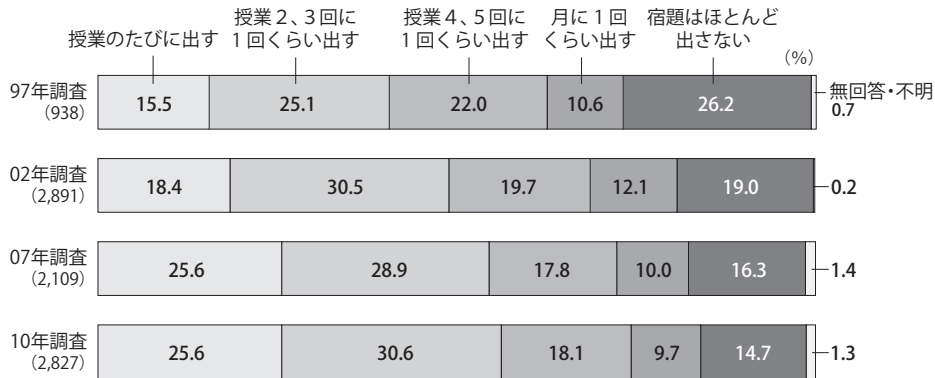
注3) *印は、10年調査より新たに追加した項目。**印は、98年調査ではたずねていない。

注4) ()内はサンプル数。

図3-5-4は、小学校教員が出す宿題の内容についてみたものである。もっとも回答が多かったのは「計算や漢字などの反復的な練習」で、98.0%の教員が回答している。ほぼすべての教員が回答している傾向は98年調査から変わらず、小学校教員にとっては定番となっている。つづいて回答の比率が高かった「音読」であるが、こちらの回答も91.7%と、ほぼすべての教員が回答しており、これまでの調査と変わ

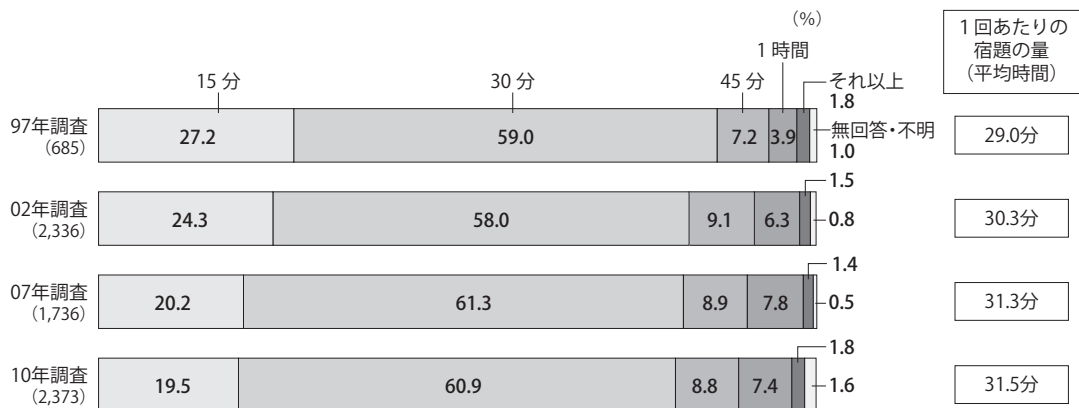
らない傾向が確認された。しかし一方で、変化がみられた項目も存在する。「授業でやり残した作業や課題」は07年調査の49.8%から7.3ポイント増加し、10年調査では57.1%の教員が宿題の内容として回答している。新学習指導要領への移行により学習内容が増えたことで、授業中に終わり切ることのできない内容や課題が、宿題として出されているのかもしれない。

図3-5-5 宿題を出す頻度（経年比較）**中学校教員**



注) () 内はサンプル数。

図3-5-6 1回あたりの宿題の量（経年比較）**中学校教員**



注1) 宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

注2) 「それ以上」は「1時間30分」+「2時間」+「それ以上」の%。

注3) 平均時間は、97年調査～07年調査は「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分に置き換えて算出。10年調査では1時間以上の項目も追加しているが、経年比較のため「1時間30分」「2時間」「それ以上」の合計をまとめて75分に置き換え、無回答・不明を除いて算出している。

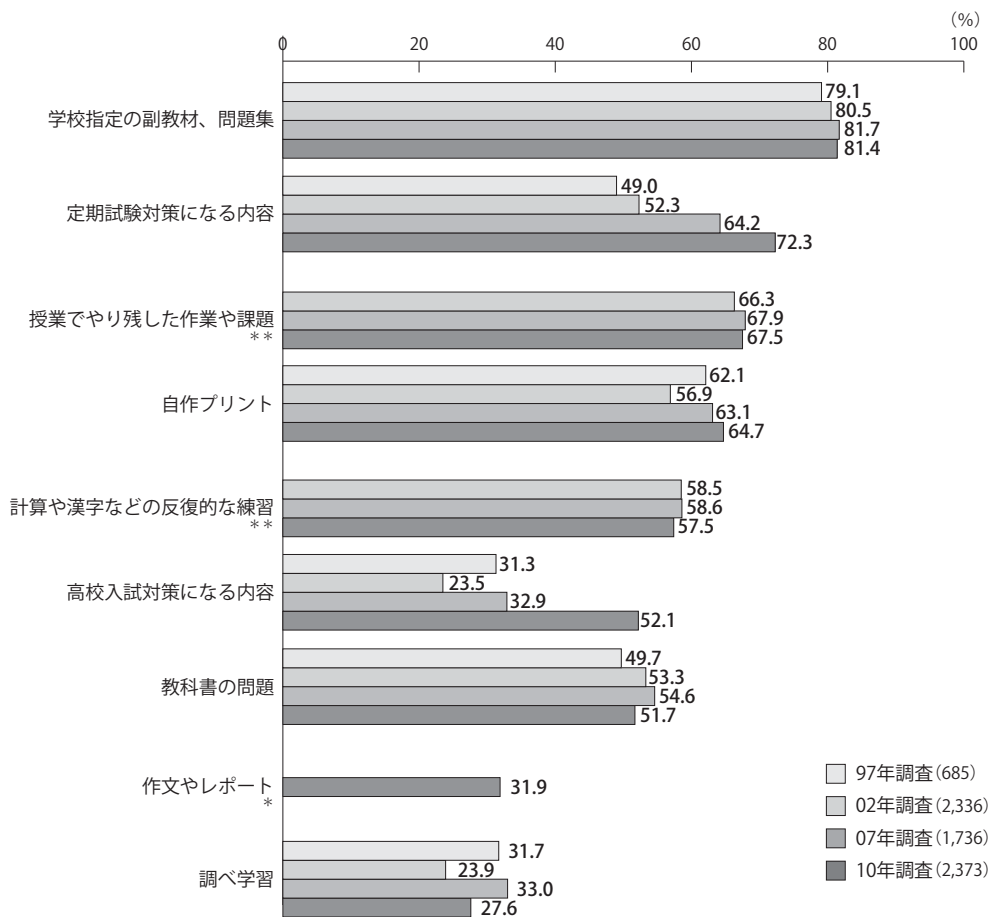
注4) () 内はサンプル数。

次に、中学校教員がどれくらいの頻度で宿題を出しているかをみてみよう。中学校教員の宿題の頻度を示したものが、図3-5-5である。「授業のたびに出す」と回答した教員は25.6%で07年調査から変化はなく、それ以外の項目についても、これまでの回答とほぼ同じ傾向がみられる。次に1回あたりの宿題の量についてみたものが図3-5-6である。もっとも教員

の回答が多かったのは「30分」で、教員の6割が回答しているが、その傾向も97年調査から変わらない。「15分」と回答した教員の比率に注目すると、わずかではあるが年々減少傾向にある(97年調査27.2% > 10年調査19.5%)など、一部で変化もみられるが、全体的な傾向に変化はみられない。

II 学習指導・進路指導の現状と意識

図3-5-7 宿題の内容（経年比較） **中学校教員**



注1) 「よく出す」+「たまに出す」の%。

注2) *印は、10年調査より新たに追加した項目。**印は、98年調査ではたずねていない。

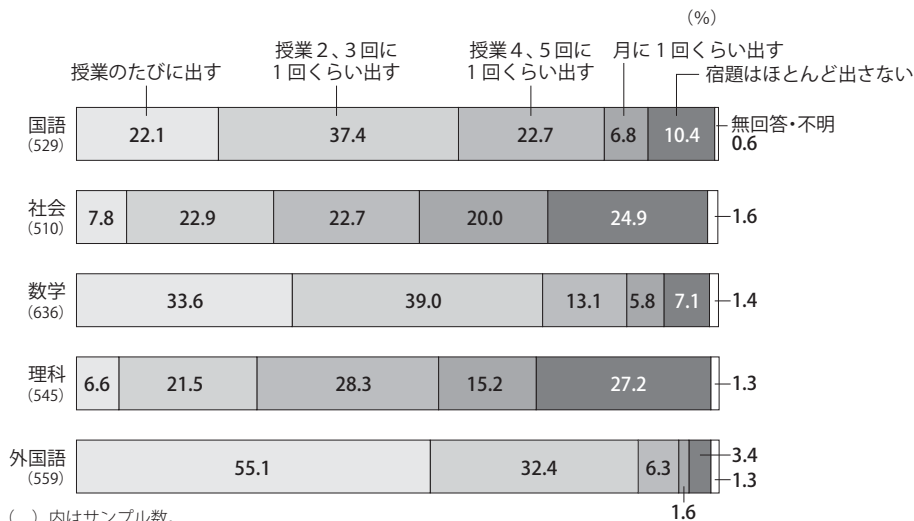
注3) () 内はサンプル数。

図3-5-7は、中学校教員の宿題の内容に関する教員の回答を経年でみたものである。もっとも回答の比率が高かったのは、「学校指定の副教材、問題集」で81.4%の教員が回答している。ただしその比率は97年調査から一貫して高く、その傾向に変化はない。次いで2番目に多かった項目は「定期試験対策になる内容」で、72.3%の教員が回答している。「定期試験対策になる内容」は調査の回を追うごとに比率が高まっており、今回は07年調査から8.1ポイントの増加となっている（97年調査からは20ポイント以上増加している）。また3番目に高かつ

た「授業でやり残した作業や課題」、「自作プリント」は6割台で、前回までの傾向から変化はない。その他の項目で目立った変化がみられたのは「高校入試対策になる内容」で、定期試験対策と同様、07年調査から10年調査にかけてポイントが大きく増加している。

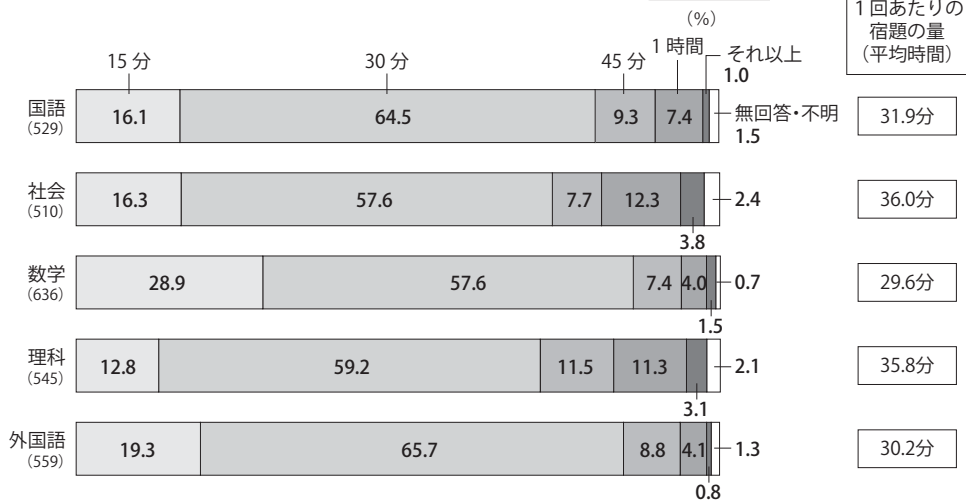
以上、全体を通してながめると、「定期試験対策」や「高校入試対策」に関する宿題内容の増加が目立つ結果となっていることから、「確かな学力」の考えに基づいた学力向上の取り組みが、学校現場においてさらに浸透、強化されている様子がうかがえる。

図3-5-8 宿題を出す頻度（担当教科別／10年調査） **中学校教員**



注) () 内はサンプル数。

図3-5-9 1回あたりの宿題の量（担当教科別／10年調査） **中学校教員**



注1) 宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

注2) 「それ以上」は「1時間30分」+「2時間」+「それ以上」の%。

注3) 平均時間は、97年調査～07年調査は「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分に置き換えて算出。10年調査では1時間以上の項目も追加しているが、経年比較のため「1時間30分」「2時間」「それ以上」の合計%をまとめて75分に置き換え、無回答・不明を除いて算出している。

注4) () 内はサンプル数。

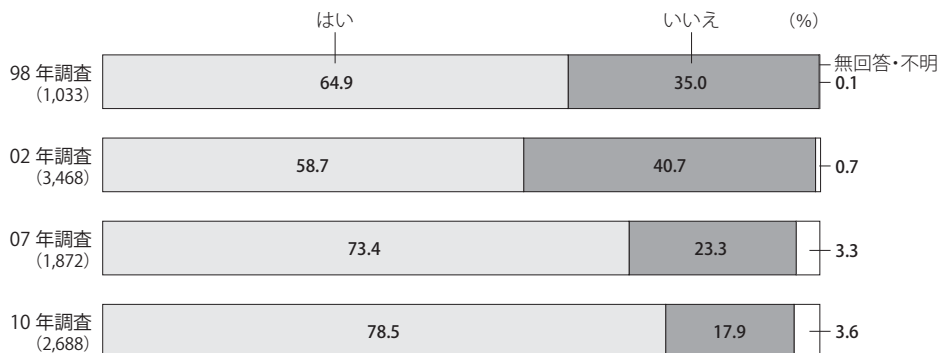
図3-5-8は、中学校教員の宿題の頻度と1回あたりの宿題の量を担当教科別にみたものである。まず、宿題の頻度であるが、もっとも頻度が高いのは外国語で、5割以上の教員が「授業のたびに出す」と回答している。つづいて「授業のたびに出す」の頻度が高かったのが数学で3割台、国語で2割台となっている。社会や理科は1割未満で、頻度は低かった。宿題を出す頻度は、それぞれの教科の特徴によって異なりがあることがわかる。つづいて担当教科別の宿

題の量をみてみよう(図3-5-9)。全体をながめると、どの教科も5～6割の教員が「30分」程度の宿題を出していることがわかる。さらに個別の教科をみていくと、社会や理科を担当している教員で「1時間」や「それ以上」の回答の比率が、他の教科よりも若干多くなっており、宿題の平均時間も社会が36.0分、理科が35.8分とやや多い。宿題の頻度だけでなく、宿題の量についても教科による異なりがあることがわかる。

第6節 家庭学習指導

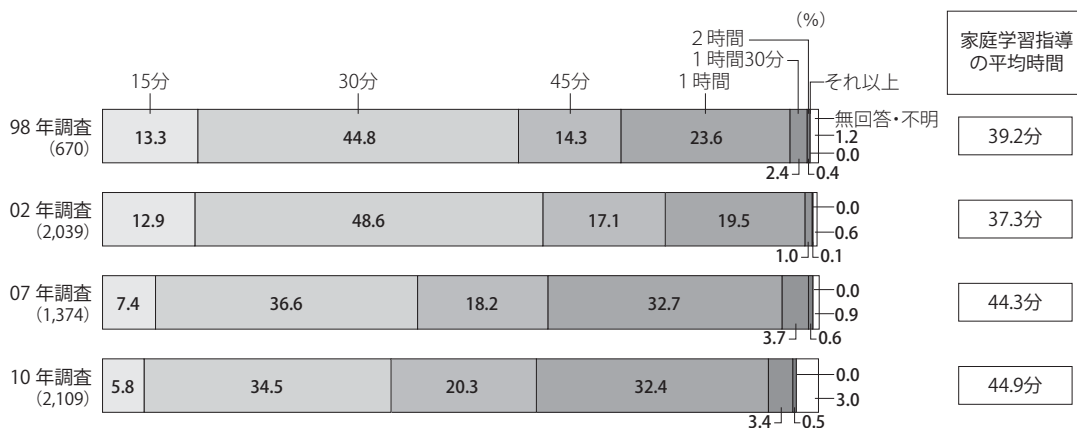
小学校では家庭学習指導をしている教員の比率が02年調査以降、年々増加しており、10年調査では8割弱となっている。教員が学校内の学習指導だけでなく、家庭における学習指導も行う傾向は07年調査よりもさらに強まっており、今まで以上に学校現場で確かな学力の向上に向けた取り組みがなされている様子がうかがえる。

図3-6-1 家庭での学習時間の指導の有無（経年比較） **小学校教員**



注) () 内はサンプル数。

図3-6-2 家庭学習指導の時間（経年比較） **小学校教員**



注1) 「あなたは、受け持ちの児童に対して、家庭での学習時間の指導をしていますか」に「はい」と回答した教員のみ対象。

注2) 平均時間は、「15分」を15分、「1時間」を60分、「2時間」を120分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

注3) 「それ以上」は「2時間30分」+「3時間」+「それ以上」の%。

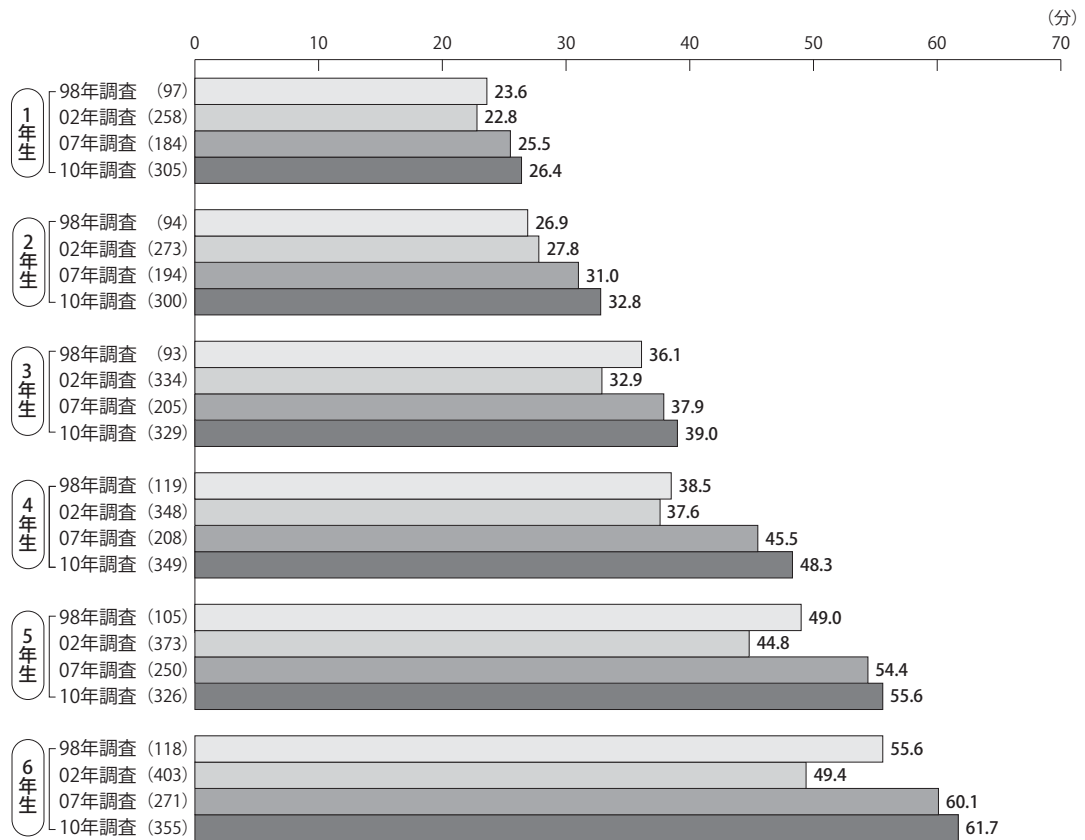
注4) () 内はサンプル数。

小学校教員が家庭での学習時間の指導をしているか、その有無を経年で比較したものが図3-6-1である。小学校では、家庭での学習時間の指導を行っている教員の比率が02年調査以降、年々増加しており、10年調査では8割弱となっている。教員が学校内だけでなく、家庭における学習時間の指導も行う傾向は、07年調

査からもさらに強まっており、今まで以上に学校現場で学力の向上に向けた取り組みがなされている様子がうかがえる。

次に小学校教員がどれくらい家庭での学習時間を指導しているのかをみたものが図3-6-2である。07年調査と比べると、ほぼ変化はみられないが、02年調査と比べると30分以下(「15

図3-6-3 家庭学習指導の平均時間（担任学年別／経年比較） 小学校教員



注1) 「あなたには、受け持ちの児童に対して、家庭での学習時間の指導をしていますか」に「はい」と回答した教員のみ対象。
 注2) 平均時間は、「15分」を15分、「1時間」を60分、「2時間」を120分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注3) ()内はサンプル数。

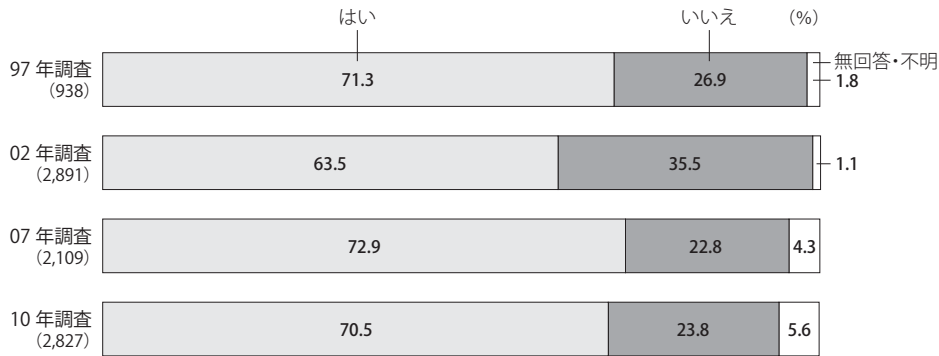
分」+「30分」と回答した教員は61.5%から40.3%に減少している。また、1時間以上（「1時間」+「1時間30分」+「2時間」+「それ以上」）と回答した教員は、02年調査では20.6%であったが、10年調査では36.3%に増加している。家庭学習指導の平均時間についても44.9分と07年調査から変化はみられないが、02年調査からは、7分程度増加している。以上をまとめると、今回の調査では、07年調査以降、家庭学習指導の時間に変化はみられなかったが、家庭学習時間の指導を行う教員は、さらに

増加していることが確認された。

最後に担任学年別の家庭学習時間の平均を経年でみておこう（図3-6-3）。10年調査の結果をみると、1年生で26.4分、2年生で32.8分、3年生は39.0分、4年生は48.3分、5年生は55.6分、6年生については61.7分と、1時間を超える家庭学習時間の指導が行われている。02年調査から07年調査にかけて、各学年において家庭学習指導の平均時間が大きくのびたが、今回の10年調査の結果は、その延長線上にあるといえるだろう。

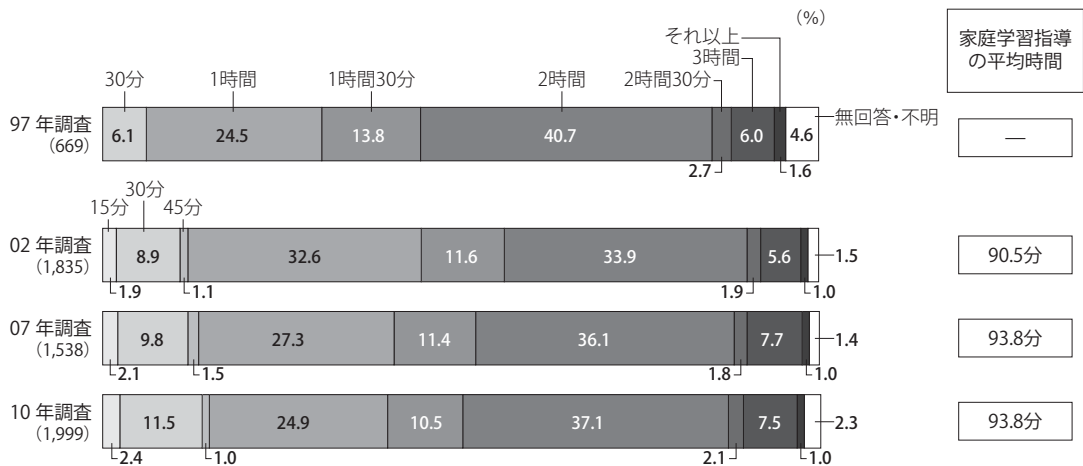
II 学習指導・進路指導の現状と意識

図3-6-4 家庭での学習時間の指導の有無（経年比較） **中学校教員**



注) () 内はサンプル数。

図3-6-5 家庭学習指導の時間（経年比較） **中学校教員**



注1) 「あなたは、受け持ちの生徒に対して家庭での学習時間の指導をしていますか」に「はい」と回答した教員のみ対象。

注2) 平均時間は、「15分」を15分、「3時間」を180分、「それ以上」を210分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。

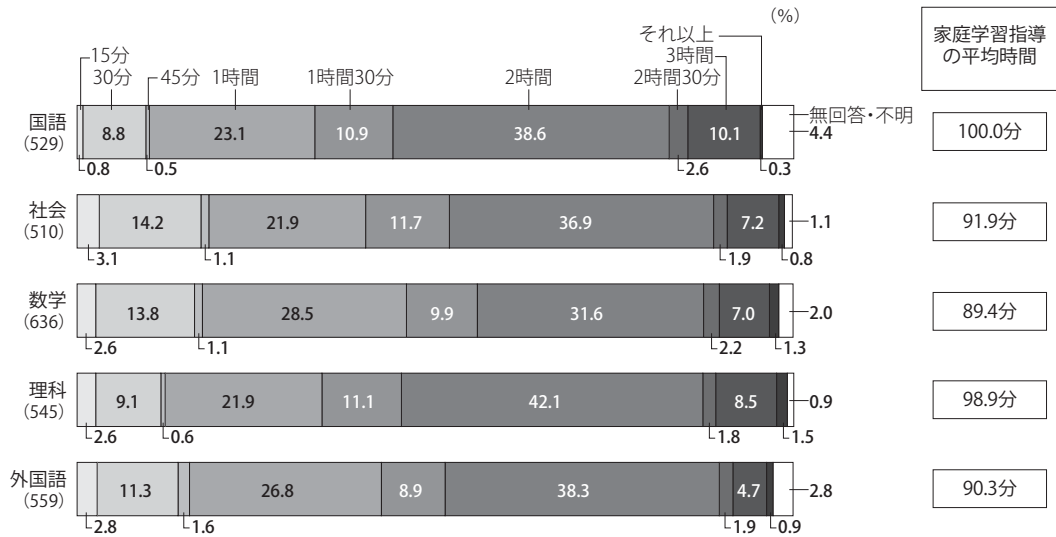
注3) 97年調査では「15分」「45分」についてはたずねていない。他の調査年と異なるため、分析から除外した。

注4) () 内はサンプル数。

次に中学校教員が家庭での学習時間の指導をどれだけ行っているか、その有無をみたものが図3-6-4である。指導状況の変化をみると、10年調査において家庭での学習時間の指導を行っているという回答した教員は70.5%（07年調査

は72.9%）で、前回調査の結果からほぼ変化はみられない。家庭学習指導の時間（図3-6-5）をみても、07年調査から10年調査にかけてそれぞれの回答頻度に変化はなく、家庭学習指導の平均時間も93.8分で横ばいである。

図3-6-6 家庭学習指導の時間（担当教科別／10年調査） **中学校教員**



注1) 「あなたは、受け持ちの生徒に対して家庭での学習時間の指導をしていますか」に「はい」と回答した教員のみ対象。
 注2) 平均時間は、「15分」を15分、「3時間」を180分、「それ以上」を210分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注3) ()内はサンプル数。

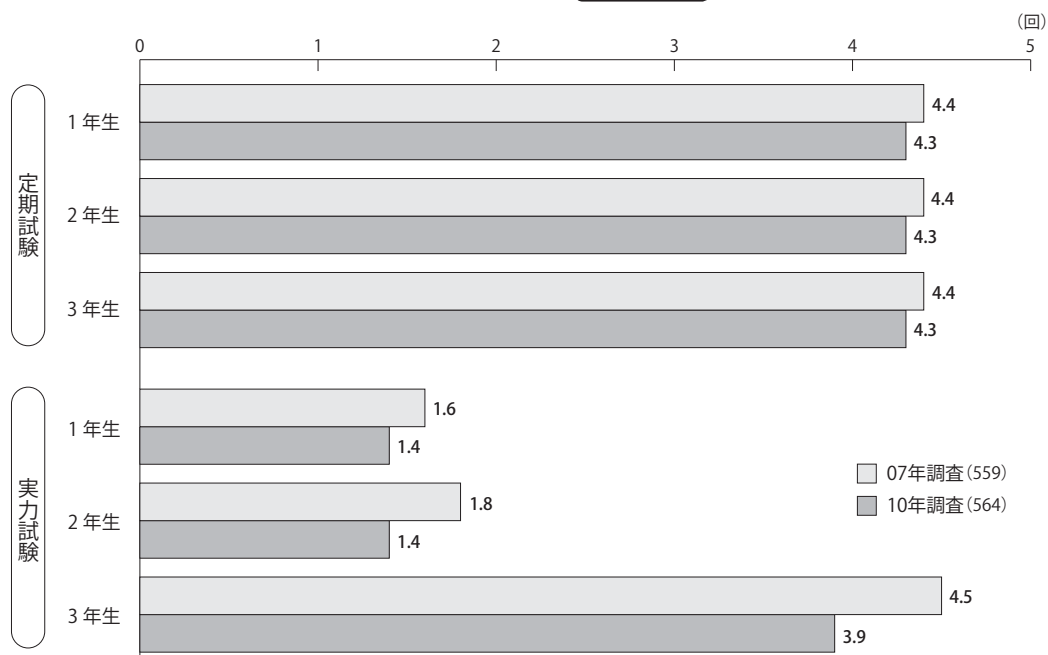
教員の指導教科によって、指導している家庭での学習時間に違いはあるのだろうか。図3-6-6はそれらの結果を示したものである。家庭学習指導の平均時間がもっとも長かった教科

は、国語で100.0分、次いで理科が98.9分と高い。また社会や数学、外国語でも約90分の家庭学習指導を行っていることがわかった。

第7節 定期試験

教科書や学校で使用している問題集・副教材、ノートに書かせた内容を中心に、観点別学習状況に合わせて問題を作成する傾向は変わらない。一方、「入試問題に対応した問題を出す」が02年調査以降、年々増加し（02年調査49.8%→07年調査58.6%→10年調査61.8%）、「テスト問題を練る十分な時間がない」が97年調査以降、年々減少（02年調査61.9%→07年調査50.2%→10年調査41.4%）している。

図3-7-1 試験の実施回数（平均回数／経年比較） 中学校校長



注1) 07年調査では、各学年の定期試験、実力試験の実施回数を実数で回答。10年調査では、各学年の定期試験、実力試験の実施月を1～12月のうちから複数回答。選択された月の数の合計から回数を算出した。無回答・不明は除いている。

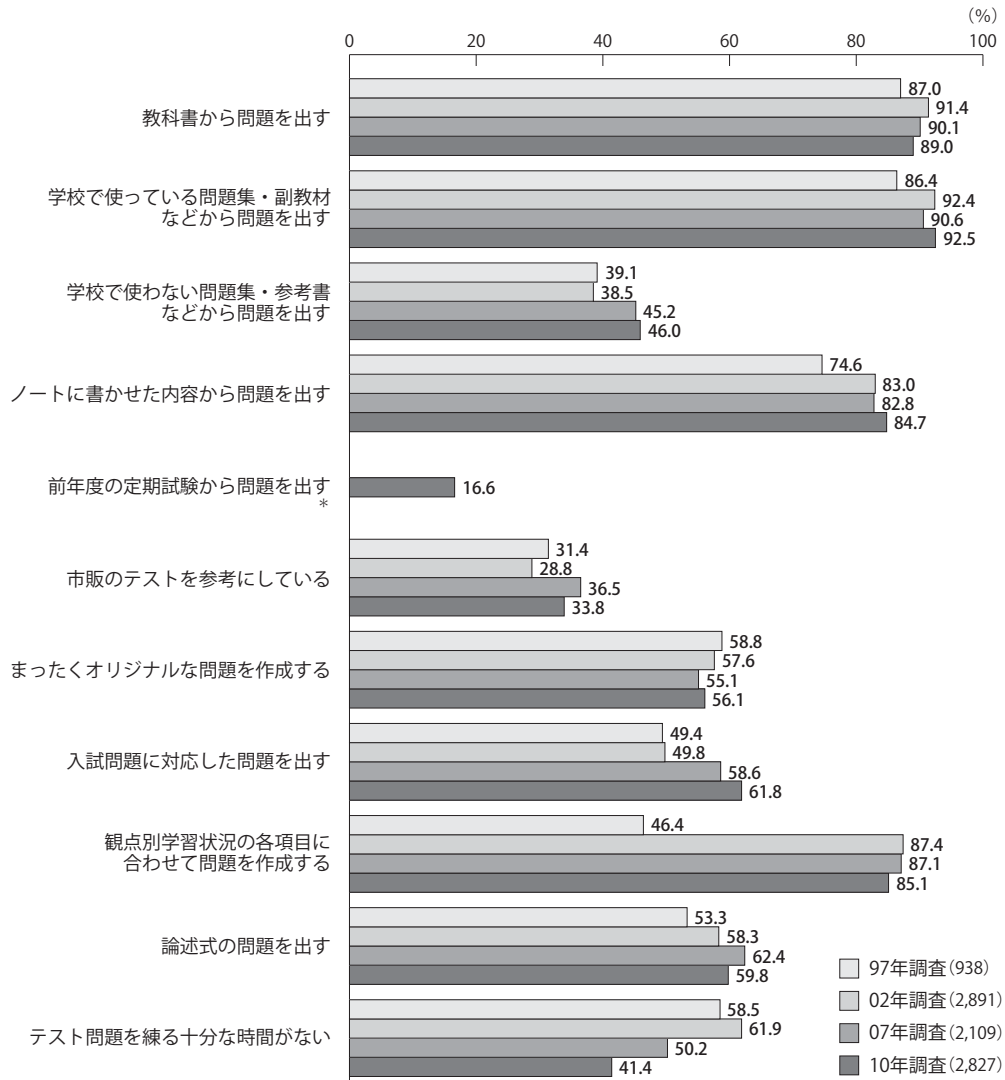
注2) ()内はサンプル数。

図3-7-1は、1年間に実施する定期試験、実力試験の回数（平均値）とその実施学年について07年調査と10年調査の結果を比較したものである。まず、定期試験の実施回数をみると、07年調査と10年調査で、1年生～3年生の試験実施に大きな変化はみられない。一方、実力試験については07年調査から10年調査にかけて、全体的に回数が減少している傾向がみられた。大幅な減少ではないものの、3年生は07年調査と比べ0.6回平均回数が減少している。こ

の背景要因として、学習内容の増加により、実力試験を実施する時間が確保できなくなっているのかもしれない。また、文部科学省や自治体独自の学力調査など他の試験が増加したことで、実力試験の回数の減少につながったのかもしれない。

次に教員に対して定期試験の出題内容をたずねたものが、図3-7-2である。「教科書から問題を出す」「学校で使っている問題集・副教材などから問題を出す」と回答した教員が9

図3-7-2 定期試験の問題作成について（経年比較） **中学校教員**



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) *印は、10年調査より新たに追加した項目。

注3) ()内はサンプル数。

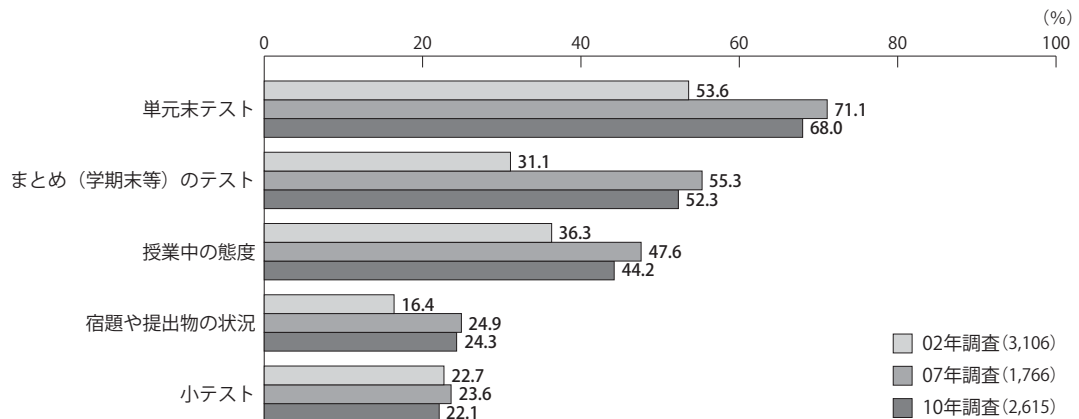
割、「ノートに書かせた内容から問題を出す」「観点別学習状況の各項目に合わせて問題を作成する」が8割5分と高い比率を示す傾向はこれまでと変わらない。07年調査から大きく増加した項目はないが、大きく減少した項目は「テスト問題を練る十分な時間がない」で、8.8ポイント減少しており、さらに02年調査との比較では約20ポイントも減少している。この背景として、教員自身がテスト問題を練らなくても、テスト問題を調達できるような環境ができ

たことで、教員がテスト問題を練らなくなったことなどが影響しているのかもしれない。また97年調査からの長期スパンで変化をみると、徐々に増加しているのが「ノートに書かせた内容から問題を出す」「入試問題に対応した問題を出す」である。基本的な知識や技能の習得、定着させることや、受験に対する意識の高まりがこれらの項目におけるポイント増につながっているのかもしれない。

第8節 通信簿

小・中学校の教員ともに「単元末テスト」や「定期試験」を重視する傾向は07年調査から変わらない。一方、中学校では「宿題や提出物の状況」「授業中の態度」を評価の材料として重視する教員が増加傾向にある。

図3-8-1 算数の通信簿作成時に重視すること（経年比較） **小学校教員**



注1)「とても重視する」の%。

注2) 02年調査、07年調査は算数を教えている教員のみ対象、10年調査は担当している教科をたずねる質問で、算数の授業を担当していると回答した教員および担当教科を無回答の教員が対象。

注3) () 内はサンプル数。

表3-8-1 算数の通信簿作成時に重視すること（教職経験年数別／10年調査） **小学校教員**

	5年目以下 (427)	6～10年目 (348)	11～20年目 (610)	21～30年目 (923)	31年目以上 (357)
単元末テスト	74.3	70.3	67.7	66.9	63.2
まとめ(学期末等)のテスト	54.7	57.1	52.9	50.6	50.1
授業中の態度	51.1	46.2	48.6	41.0	35.6
宿題や提出物の状況	28.3	24.4	25.7	22.4	22.5
小テスト	22.5	22.4	21.8	21.5	23.9

注1)「とても重視する」の%。

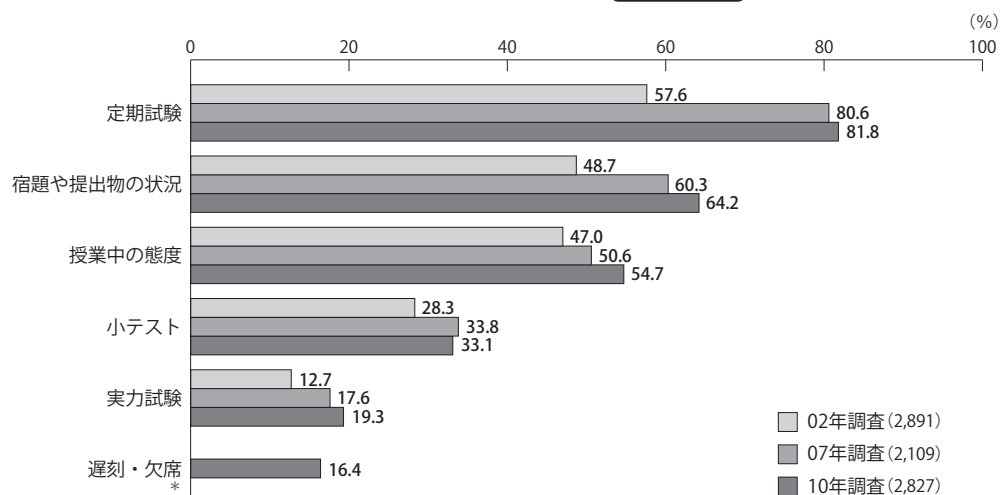
注2) 算数を教えている教員のみ対象。() 内はサンプル数。

図3-8-1は、小学校教員が算数の通知簿を作成する際に重視することを、経年でみたものである。「単元末テスト」を「とても重視する」と回答した教員が68.0%と最も高い傾向は前回調査から変わらない。次いで、「まとめ(学期末等)のテスト」が52.3%、「授業中の態度」が44.2%と続く。「宿題や提出物の状況」「小テスト」を「とても重視する」と回答した教員はそれぞれ2割台にとどまっている。

では教職経験年数によって、算数の通信簿のつけ方に違いはあるのだろうか。それらをまと

めたものが表3-8-1である。「5年目以下」の若手教員と「21～30年目」「31年目以上」のベテラン教員との間で10ポイント以上の差がみられたのが「単元末テスト」(「5年目以下」74.3%>「31年目以上」63.2%)、「授業中の態度」(「5年目以下」51.1%>「31年目以上」35.6%)、また5ポイント以上差がみられたのが「宿題や提出物の状況」(「5年目以下」28.3%>「31年目以上」22.5%)である。3項目とも、教職経験年数を経るにつれてポイントが減少する傾向がみられる。

図3-8-2 通信簿作成時に重視すること（経年比較） **中学校教員**



注1) 「とても重視する」の%。

注2) *印は、10年調査より新たに追加した項目。

注3) () 内はサンプル数。

表3-8-2 通信簿作成時に重視すること（教職経験年数別／10年調査） **中学校教員**

	5年目以下 (463)	6～10年目 (375)	11～20年目 (682)	21～30年目 (1,088)	31年目以上 (207)
定期試験	82.5	82.7	81.8	80.6	85.0
宿題や提出物の状況	71.3	67.7	64.2	61.7	54.6
授業中の態度	60.3	55.7	57.0	52.0	44.9
小テスト	31.3	32.0	37.8	31.4	33.3
実力試験	24.0	23.2	19.5	16.5	17.9
遅刻・欠席	21.2	18.1	15.8	14.2	15.5

注1) 「とても重視する」の%。

注2) () 内はサンプル数。

次いで、中学校教員が通信簿の作成の際に重視することを調べたものが図3-8-2である。もっとも回答比率が高かったものは「定期試験」で81.8%、次いで高かった項目が「宿題や提出物の状況」で64.2%、さらに「授業中の態度」が54.7%と続いている。また経年の変化をみたところ、07年調査から大きく変化した項目はないものの、02年調査からの変化では、「定期試験」や「宿題や提出物の状況」「授業中の態度」「実力試験」などでポイントの上昇がみられる。

教職経験年数別に、通信簿作成時に重視することをみたところ（表3-8-2）、教職経験

年数にかかわらず、もっとも重視することは「定期試験」である。一方、「宿題や提出物の状況」「授業中の態度」は、「5年目以下」と「31年目以上」の教員の間で15ポイント以上の差が、また「実力試験」や「遅刻・欠席」でも5ポイント以上の差が確認された。教職経験が若い教員ほど、「宿題や提出物の状況」や「授業中の態度」、「実力試験」や「遅刻・欠席」を重視する傾向がみられる。以下は推測の域をでないが、若手教員ほど教職経験年数が浅く、生徒を評価するための判断基準が定まっていないことから、可視的な指標をより重視するのかもしれない。